
女の子のうた

りきてっくす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女の子のうた

【Nコード】

N7136L

【作者名】

りきてつくす

【あらすじ】

高校二年の夏、ふとしたきっかけで、ゆみ子はなぞの美少女と知り合った。声はハスキーで男言葉をしゃべるし、行動パターンがとても乱暴。おまけに自分のことをヨウスケと名乗っている。変なやつ、と思いつつ、ゆみ子は次第にその女の子に惹かれてゆく……。飯野こゆみ先生に捧げる小説です。

出会いはある日突然に

この小説を、飯野こゆみ先生に捧げます。

テディーベアのヌイグルミの中にかくしておいたピンクのロータ―を、ママに見つかってしまった。

どうやらあたしの留守中、勝手にスイッチが入って動き出したらしい。ママが、あたしのシーツを洗濯しようとベッドへ近づいたところ、ナイトテーブルのわきに置かれていたダッフィーのテディーベアが、ぶいーん、ぶいーんとリズムカルに唸っていたのでびっくりしたのだという。

おかげであたしは、学校から帰るなり大目玉を食らってしまった。「こんなもの、どこで買ってくるのよ!」

今どきローターなんて健康グッズのお店でふつうに売ってるし。

「あんたには、まだ早いわよ」
なに言ってるの、もう高二じゃん。

「とりあえずこれは、お母さんが処分しておきますからね」
やーん、千八百円もしたのにーっ。っていうか、こっそり自分で使うんじゃないでしょうね。

「こんなわけの分らないもの買っただったら、しばらくお小遣いはあげません!」

もう最悪ーっ!

つてなわけで、台風一過、ピーカンの青空のもと、せつかくの日曜日だというのに、あたしはぶすつとふてくされながらスターバックスのテラス席で、甘ったるいフラペチーノをかきまぜていた。

「きやはは! ゆみ子ってば、ちよードジっ子」

親友の沙織が、可笑しくつてたまらないといったふう足をばた

つかせている。あたしは、いよいよほつぺたを膨らませ、冷たいホイップクリームをむりやりのどに流し込んだ。

「あたしのせいじゃないもん、デディーのせいだもん」

「バカねー、使わないときはちゃんと電池抜いておきなさいよ。アダルトグッズなんてのはねえ、ほとんどがメイド・イン・チャイナなのよ、ショートして煙が出てきたなんて話もよくあるんだから」

「もうぜったい買わない」

「うふふ、そのうちまた欲しくなるって」

「彼氏つくるもん」

あたしは、さんさんと陽のふりそそぐオープンカフェの全景をぐるっと見渡してみた。休日の午前十時、駅前のスタバはカップルの姿であふれかえっている。ここで待ち合わせをして、それからデパートへ繰り出すというのか。もう、羨ましいいったらありやしない。

煎ったコーヒー豆のおいを胸一杯に吸い込んでから、ため息といっしょに吐き出した。

「あーあ、どつかにあたしのこと好きになってくれる、カッコ良い男の子っていないかなあ」

「いるいる、あんたルックスちょーイケてんじゃん。その気になって声かければ、ケーキにたかるアリみたいにうじゃうじゃ寄ってくるって」

「いや、そういうんじゃないってさ」

あたしは、グロスの光るくちびるをぺろっと舐めてから、汗をかいたコーヒーカップをコースターの上に戻した。

「もっとこう運命的な出会いがしてみたいのよ、身を焦がすような恋ってやつ？ できれば、ちょっぴり危険なシチュエーションとかでさ」

「ばーか、ハーレクインロマンスの読み過ぎ」

「そうかなー」

カフェから見下ろす駅前のロータリーで、鳩がいつせいに飛び立った。鳩の群は、風になぶられる女の髪の毛みたいにぐねぐねと形

状を変えながら、銀色の水しぶきを散らす噴水の方へと向かってゆく。

沙織の携帯が鳴った。

「あ、ケンジからメール」

素早く内容をチェックして、彼女はちょっと困った顔であたしを見上げた。

「ごつめーん、ケンジのやつ、これから二人でどっか行こうだって」
キツネのしっぽみたいにストラップのじゃらじゃら垂れ下がった携帯をぱちんと閉じて、片手でおがむまねをする。その表情がいかに嬉しそうだったので、なんとなく憎らしくなった。

「遠慮しないで行きなよ、あたしは一人ぼっちでも生きてゆける少女なんだから」

「そう、へソ曲げないでよー。ケンジの友だちにカッコ良い子いたら真っ先にゆみ子に紹介するってば、ね？」

「べつにいいー、期待してないしー」

あたしは、ふんと鼻をならし、無然とした表情でチョコレートマフィンにぱくついた。どうせ恋人もいないし……、太ってやる。そんな様子を、沙織はあきれた顔で見つめている。

「ほんと、ゆみ子ってチョコ好きだよー。あんたとキスしたら、きつとチョコの味がするでしょうね」

「試してみる？」

「遠慮しとく」

ぽりん。

溶けかかった氷のかけらを噛み砕き、沙織がそっぽを向いた。その耳元で、赤い石の入ったきれいなピアスがふるんと揺れた。たしか、以前ケンジに買ってもらったと自慢してたやつだ。

「あれ？ でも沙織ってさ、この前ケンジと大喧嘩したばかりだよ。別れるー別れるーって騒いでたくせに、もう仲直りしちゃったわけ？」

「う、うん、まあね……。誕生日に、カルティエのラブリング買った

てくれるってゆーから、より戻しちゃった。へへ」

「ふう……、あいかわらず打算的な恋愛してるのね。惚れたはれたも金しだい、ってか？」

「ほっとけ、ばーか。物欲と性欲が、今のあたしをつき動かす原動力になってんのよ」

言いながら、沙織はコンパクトを覗き込んで素早く自分の顔をチエックした。

「頭くるなあ、ファウンデーションをUVカットのやつにかえてから、メイクのノリが最悪」

「紫外線なんて気にしなくていいのに……」

どうせ面の皮厚いんだし、と小声でつぶやいたのをしっかり聞かれてしまった。

「やかましいわ」

イスの背もたれにどんと体重をあずけ、薄目をあけて空を見上げてみる。

昨日まで荒れ模様だった空は、今日は一転、それまでの憂さを晴らすかのように澄み渡り、どこまでも硬質なコバルトブルーは鋭い夏の陽射しの連続スペクトルをたたえながら無限の広がりを見せていた。何も考えず出がけにはおってきたブラックデニムのジャケツトが、熱を吸収して蒸しタオルのようになっていた。フラペチーノの残りを一気に飲み込むと、そのときだけ一瞬汗がひいた。

「じゃ、ワリいけど、あたしそろそろ行くわ」

沙織が自分の飲食分、きっちり八百十九円を置いて立ち上がろうとする。あたしは、あわてて言った。

「あ、送ってくよー」

「いいよ、こんな短いスカートはいてバイクの後ろなんか乗れないもん」

「……だよね」

たしかに膝上二十センチのフレアミニをはいてタンDEMシートにまたがるのは危険だ。道行く男たちに目で犯されちゃうし、へたを

すりゃあ携帯で写真撮られまくるかもしれない。

でも、そう言うあたしだって、フェイクレザーのホットパンツをはいている。素足の美しさには少なからず自信があったりする。

「あんだ、そんな格好してバイクでこけたりしたら、マジお嫁に行けない体になるわよ」

「こけないもん。あたし運転上手だもん」

ほんととは今朝も出がけに立ちこけて、おじいちゃんの大切な植木を半ダースほどおしゃかにしてしまった。でもこの陽気、ライディングパンツなんてはけない。

熱々ベタベタのカップルたちをかき分けるようにして店を出ると、安全運転しろよー、と捨てぜりふを残し沙織は駅のほうへ去っていった。その後姿を見送ってから、あたしは颯爽とガード下にある駐輪スペースへ向かう。そこには通勤用のチャリにまじって、数台のバイクがこつそりとめられていた。

その中でもひととき目を引く美しいカーディナルレッドのボディ、あたしの命の次に大切な愛車ヤマハXVビラーゴ。アメリカンタイプの可愛い二百五十CCバイクだ。

「あたしには、あんだがいるもんねー、ぜんぜん寂しくなんかないよーだ……………ぐすん」

頑丈なケープブルックをはずしシートにまたがると、ツインのリヤサスペンションがぎしりと深く沈み込んであたしの体重を受けとめる。傍若無人に前方へ突き出したフロントフォークがなんとも挑発的で、あたしのちっぽけな矜持に火をつける。自慢じゃないけど、ほんとは自慢だけど、うちのがっこでスクーター以外のバイクに乗ってる女の子は、あたしだけだ。

ビンテージスタイルのハーヘルメットをかぶる。白地にチェリーピンクのラインが入ったやつ。ゴーグルは水中眼鏡みたいデザインでちよっぴり恥ずかしいけど、装着したとたん視界にモノトーンのフィルターがかかって、俄然あたしを非現実的な世界へといざなってくれる。

さてと、どこへ行つてやろうか。

どこでもいいや。

みごとに晴れ渡った夏空。

十七才という多感な年頃。

自由にバイクを駆つて未知の世界へ飛び出せば、どこへ行つたつて、きつと何がしかの面白いことが待ち受けているに違いないんだから。

両足を踏ん張つて思いきりふんぞり返ると、あたしは力一杯キックスターターレバーを蹴り込んだ。

ガコン。

瞬間、去年死んだおばあちゃんの、しわだらけだけど優しい笑顔が浮かんだ。

ゆみ子は、本当におてんばさんね。

だめ、エンジンかからない。

もう一度。

今度は、現国の大山教諭の陰険なカマキリ顔を思い浮かべながら、怒りと憎しみをこめて思いっきりレバーをキックした。

ガコン。

ドッ、ドッ、ドッ、ドッ、ドルルーン！

おーけー。

独特の断続的なエグゾーストノートを放ちながら空冷V型エンジンが息を吹き返す。重低音で唸りをあげるキャブレターが、あたしのキュートなヒップをずんずん震わせる。この快感は、アメリカンスタイルのバイクでなきゃ味わえない。

カストロールモーターオイルの焼け付くおいを胸いっぱい吸い込みながら、あたしは知らず知らずのうちに微笑んでいた。

さてと、行きますか。

バイクを発進させようと、腕に力をこめる。

と、そのとき。

突然、背後からほつそりとした腕があたしのウエストに巻きつい

てきた。ぎゅつと力をこめて抱きしめてくる。

え、後ろにだれか乗ってるー！

慌てて振り向くと、そこには精悍な顔つきをした美少女の鋭いまなざしがあった。

「きゃあ、だだ、誰よあんた？」

しがみつく腕を振り払おうと懸命にもがくと、彼女はあたしの目をまっすぐに見つめ返しながら、女の子にしてはちょっとハスキーな声で怒鳴った。

「いいから、早く出せってば！」

「冗談じゃないわ、ちよつと降りなさいよ」

「頼むってば、追われてるんだから」

え？

つつく……。

出会いはある日突然に（後書き）

飯野こゆみ先生、お誕生日おめでとつございます！

べいびー逃げるんだ

ゴーグルをずり上げて、その美少女の顔をまじまじと見つめた。きゅっとつり上がった目もとが勝ち気そうな感じだけど、なんていうかオリエンタルな感じの美人で、髪をアップにして浴衣なんか着せたらすごく絵になりそう。たぶん、ほとんどノーメイクだと思うけど、でもファッション誌の『街角で偶然みつけた美少女』みたいなコーナーにふつうに写真が載っていそうな、あでやかで華のある顔立ち。

ただ、外見の美しさもさることながら、彼女からは何だか不思議なオーラが感じられる。どこか普通じゃない。奇妙にエキセントリックで、それでいてチープというわけでもない。たぶん神秘的と言ったほうが正しいのかもしれない。

とにかく、その風変わりな美少女が、今あたしの背中にべったりとはりついている。予想もしていなかった突飛な出来事に、ついあたしの声もうわずってしまふ。

「追われてるって……、誰によ？」

そう訊ねると、彼女は振り返りもせず、右手の親指だけで背後を指し示した。

「あいつら」

「げっ」

見ると、若い男が三人、もの凄い形相でこちらに向かって駆けてくる。一見して、道徳や社会秩序なんか屁とも思っていませーん、みたいな人相の悪いお兄さんたち。あたしのデリケートな心臓が、エイトビートを刻みはじめた。

「なっ、なっ、なんなのよ、あいつらは？」

「強姦魔」

「じ……」

「ほら、早く出せよ。捕まったら、あんたも一緒にヤラれちゃうよ」

や・ら・れ……ちやうーっ？

背中から嫌な汗がぶわーっとふき出し、あたしは無意識のうちに愛車ヤマハ・ビラーゴを急発進させていた。後輪が乾いた路面をじやりつと噛むと、慣性の法則で上体がぐんと反り返る。あたしの腰にしがみつく彼女の腕にも、ぎゅっと力が入った。

と、とにかく逃げなくちゃ。

っていうか、なんでこんなことになっちゃうのよーっ！

バックミラーを覗き込む余裕さえなく、あたしは無我夢中でバイクを走らせた。駅前の広い通りへ出ると、前方に右翼の街宣車が軍歌を垂れ流しながら進路をふさいでいたので、強引にわきをすり抜ける。追い抜きざま、ハンドスピーカーからもの凄い勢いで罵声が飛んできた。

「こらあ！　なんだお前らーっ、めりけんのバイクになんか乗りやがってーっ」

うるさい、ばっかっ。

そこで一気にバイクを加速させた。

朝、家を出たときにはまだそこらじゅうに水たまりがあって、それが朝日を受けてまるでパンコールのドレスみたいにくらきら輝いていたけど、今は乾ききった車道にゆらゆら陽炎が立ちのぼっている。空から照りつける眩い陽射しと、四サイクルV型二気筒エンジンが放つ熱気であたしの体は火照り、急激にのどの渇きをおぼえた。

信号を五つほど越えたところで、後ろに乗せた美少女がノーヘルだということに気づく。

やばい、警察につかまる。

あわてて次の交差点を左折した。空室だらけのテナントビルが建ちながら、寂しい裏通りへと出る。車は一台も走っていないかった。そこで、あたしはゆっくりとバイクを路肩へよせ、バックミラーを確認した。

よし、誰も追ってこない。

あたりまえだ。徒歩でバイクに追いつけるはずもない。ようやく人心地がついて、あたしはバイクを停止させ、大きく息をはき出した。

「ふうー、どうやら無事逃げられたようね」

どれだけ走っていたのだろう。たぶん、ものの十分と経っていないはずだ。でも、この一瞬の逃走劇が、あたしにはもの凄く長い時間を感じられた。

ゴーグルを持ち上げ、後ろに向かって声をかける。

「もう大丈夫よ。さあ、早く降りてちょうだい」
返事がない。

「ねえ、降りてつてばあ」

答えるかわりに、腰に回した腕にぎゅっと力を込めてきた。どうやらあたしのバイクから降りる気はなさそうである。

「もう！　じゃあ、あんたの好きなところまで送ってあげるから。」

でもその前に、ちゃんとヘルメットかぶってよね」

とたんに、はずんだハスキーボイスが返ってきた。

「お、さんきゅー。おめー、あんがい良いやつなんだな」

お人好しとも言っ。

「んで、どこにあんのメット？」

「そのサイドバッグの中よ」

タンDEMシートの左右にぶら下げてある大振りのバッグからこそぞ予備のヘルメットを取り出して、彼女はちつと舌打ちした。

「なんだよー、この格好悪いデザインのメットは……」

「文句ゆーなら、もう乗せてあげない」

「わーった、わかりました」

ぶつぶつ文句を言いながら、そのジェットヘルメットを頭からすっぽりとかぶる。セール品だったので衝動買いしたけど、デザインが気に食わなくて予備にしていたそのヘルメットは、なぜだか彼女によく似合っていた。

「あら、けっこうさまになってるじゃん」

「ほんとかあ？」

「ええ、本当よ。まるで三流のSF映画に出てくる宇宙船のパイロットみたい」

「なんだそりゃ？」

彼女と視線を合わせ、ふふつと笑った瞬間、お腹がぐうと鳴った。腕時計をのぞいてみると、あと二十分足らずでお昼だ。

「ねえ、どっかでランチしない？ もちろん、あんたのおごりでよ」
返事をするかわりに、彼女が鼻をぐがつと鳴らした。それを了解の合図と受け取って、あたしは再びバイクを走らせる。急発進にあわてた彼女が、あたしの背中にぎゅつとしがみついてきた。さつきよりも、ずっと強く……。押し付けられた乳房の感触がやけに肉感的で、あたしはついどぎまぎしてしまった。

え、女の子同士なのに……なんか変な感じ。

ドーナツかクレープが食べたいと主張するあたしと、ラーメンが食いたいなどとわがままをぬかしおる彼女の、両方の意見を取り入れて、外資系スーパーマーケットに隣接するバイキング形式のレストランに入った。ここは和洋中華なんでもありありの、およそあたしたちが考えつくレベルのメニューなら、すべてそろっているという便利なお店だ。

九十分食べ放題、消費税込みで千五百円。

女子高生のランチタイムにしてはちょっと高い気もするけれど、でもどうせ支払うのはこの見知らぬ美少女だし。

席へ着くなり、彼女は取り皿を手に、大はしやぎで料理を略奪して回った。こういうお店では、人間の本性というものが如実に現れるから気をつけなくてはいけない。間違っても、付き合いはじめたばかりの恋人なんかと一緒に来てはだめだ。

「ちよつとお、ラーメンが食べたいだなんて言っておいて、さつきからぜんぜん違うものばつか口にしてるじゃん」

「うっせーな、何を食おうが俺の勝手だろー。だいいち、こういう

ところのラーメンってのは不味いんだよ」

あたしは、これも専門店などに比べると格段に味の落ちるチヨコレートケーキをつつきながら、外見からは想像もつかない彼女の旺盛な食欲を、呆れながらながめていた。

「あんた、そんなにバカ食いして、よくプロポーション維持できるわねえ」

「まあね……、おかげで姉貴はだいぶ苦勞してるみたいだけど」

「え？」

「あ、いや、なんでもない。こつちの話……」

食事が一段落したところで、あたしは喉元に引つかかっていた質問を彼女にぶつけてみた。

「ねー、どうして、あんなやつらに追われていたの？」

ダージリンティーをすすりながらそう訊ねると、なにか嫌なことでも思い出したのか、彼女の美しい顔が見る見る険しい表情へと変わっていった。

「……どうしても聞きたいか？」

「聞きたーい。てゆうか、聞かないとストレスで死ぬ」

すると彼女は、頬杖をつきながら目を伏せ、ちよつとふてくされた感じでしゃべりはじめた。

「今日は、なんだか知らねえけど、やけに電車が混んでてよ」

「まあ仕方ないわね。今月最後の日曜日だし、朝からピーカンのお天気だもん」

「ああ、でもそのせいで俺は、次々と乗り込んでくる乗客に押されて、ドアんところでカエルの標本みたいにべしゃって潰れてたんだ。そしたらよ……」

「そしたら？」

彼女の美しい瞳にめらつと炎がともる。

「誰かが、カーゴパンツの上から俺のケツを執拗になで回すんだ」

「げっ痴漢？ やだなあ」

「こつちはぜんぜん身動きとれねえしよー、後ろ振り向こうにも首

が回んねえんで、俺もあつたま来て、屁でもひっかけてやろうかと思っただけだ」

思わずダージリンティーを吹き出した。

「なんだよ、きつたねーな」

「……ごめん」

ってゆーか、もうちよつと女の子らしく喋りなさいよね。なによ、そのがさつな言葉づかい。

「でも、満員電車で屁なんかこいたらパニックがおきるだろ？」

「……そりゃまあ、おきるでしょうね」

「で、目の前のドアが開くまでじつとこらえてて、開いた瞬間、自由に動くようになった手で、そいつの指ひっ掴んだんだ」

「お、やるじゃん！ で、叫んだのね？ この人痴漢でーす」

「いや」

にやりと笑った。

「その指へし折ってやった」

うわあ……。

「ず、ずいぶんと乱暴なことするのね」

「だってよー」

彼女の頬が、ぷうーっと膨らむ。

「そいつ、ただ触るだけじゃないんだぜー。ケツの割れ目にそって指を這わせてくるんだ」

こつという感じでな、と言いながら彼女は、自分の指をあたしの目の前までもつてきて、くいつくいつと、やらしい動きをして見せた。今度はダージリンティーが気管に入った。

「けほっ、けほっ」

「おい、もうそれ飲むのよせよ」

そう言つて身を乗り出してくるので、背中をさすってくれるのかなと思つてたら、あたしが涙目になつて咳き込んでるすきに、食べかけのチョコレートケーキを自分の口の中へ放り込んだ。

ぽい。

「うん、美味い。けっこういけるねこれ」

「あー、それあたしのー」

「おめーってチョコ好きだな。キスとかしたら、きっとチョコの味がするんだろうな」

「ふん、さつきも友だちに言われたわよ」

ケーキを飲みくだし、自分の指をペロペロなめるその仕草がみょうに可愛らしくって、つい文句を言う気力が失せてしまう。

何だろう、この子……。

可愛い外見と、乱暴な言葉づかいのギャップが、みょうに心地よく思えて、あたしは戸惑いをおぼえた。この、奔放でいて爽やかな感じて、いったい何だろう？

何かに似てる。

……例えるなら。

そう、例えるなら、風。

春の風。

暖かくて、生命力にあふれ、とつてもたおやかで、それでいて時折びゅうーって強く吹く。やっと咲いたと思った桜の花びらを無惨にも散らしてしまつて、でもぜんぜん悪気なんてなくて、さーっと吹き抜けてゆく。そして知らぬ間に、夏を運んでくる……。

たぶん、そんな感じ。

そう、この子からは春風のような、しなやかな美しさを感じる。

そう思つて、あらためて彼女の顔をまじまじと見つめると、あたしの視線から一瞬目を逸らして赤くなつた。

「なんだよー」

かわいー。

「じゃあ、さつき追つて来たやつらは、その痴漢の仲間だったってわけね」

「ああ、集団で一人の女の子を取り囲んで、触りまくってたらしい……」

「ひつどーい。でもあんた、あのときあたしと出会っていなかった

ら、今ごろ大変なことになってたかもね」

「まあね……」

「感謝してる？」

「してるけどさ」

ここで彼女は、ぐぐつと身を乗り出してきた。

「でも俺、バイクに初めて乗ったんだ。すげーな、バイクって。スピード感がこう直に伝わってくるしよ、排気音なんかも、ずんずんって腰を揺るがすくらい強烈で……。俺、けっこう感激したんだ。おめー、すげーな、女のくせにバイクとか乗り回してよ」

「へへへー」

バイクのこと褒められると、もうだらしないくらいに顔の筋肉が緩んでしまう。あたしって、バイクばか。もっともっと褒めてくれたら、木にだって登っちゃうかも。

「なあ、あのバイク乗ってどっか行こうぜ。峠のほうとか、海沿いの道とかさ。天気だってこんなに良いことだし」

「うーん、でもあんまり燃料入ってないんだー。そうだ！ あんた燃料タンク満タンにしてよ。そしたらどこへだって好きなとこ連れてってあげる」

あたしが指をぱちんと鳴らすと、彼女はがっくりと肩を落とした。

「残念だなあ。俺、今の所持金、千二百三十円しかねえんだ」

「なーんだ、そうかあ……」

ちよつとがっかりして、ダージリンティーの残りを一気に飲み干した。

全部、吹き出した。

「えーっ！ じゃあ、ここの払いはー？」

答えるかわりに、彼女は鼻をぐがつと鳴らした。

つつく……。

おとこのこ、おんなのこ

レジで会計をすませ、あきらかに軽くなったウォレットをお尻のぼっけに突っ込むと、切ない切ないため息がもれた。

あーあ、つまらないことで余計な出費しちゃったな。それでなくとも、今月はお小遣いもらえないというのに……。

ちよつとブルーな気分のまま駐車場へ戻ると、あのおかしな美少女があたしのバイクにまたがって、ぶおーん、とか、ばばばば、とか叫びながら体を揺すっていた。

ほんと変な子。

でも、無邪気な笑顔がまぶしいくらい魅力的に見えた。ちよつと歯並び悪いけど、でもときおり唇の合間からのぞく八重歯が真っ白できれい。何かひとこと文句を言ってやろうと歩み寄り、しかし彼女と目が合ったとたん自分が何を言おうとしていたのか忘れた。あまりに悪気のないその顔を見て、もう些細なことなど、どうでもよくなってしまったのだ。

なんか調子狂うなあ。

「ほんじゃ、帰ろっか」

なかば投げやりに言つと、彼女は急にバツが悪そうな顔をしてつぶやいた。

「……悪かったな、いろいろと振り回しちゃってよ」

「いいよ、あんたといると、けっこう楽しいもん」

「それ本当？　ならいいんだけど」

はにかんだ笑顔を見せ、彼女がずりっずりっとお尻をずらしながらタンDEMシートへ移動する。入れ替わるようにあたしがサドルにまたがると、初めて出会ったときみたいに背後から腕がのびてきて、ぎゅつと腰にきつく巻きついた。

「おまえ……良い匂いがするな」

不意に彼女がつぶやく。

「え？」

突然、何を言い出すのやら。でも、そんなこと言われたら悪い気はしない。

「こうしてると、とっても良い匂いがするんだ」

「コロンの匂いかな？　でもお金なくってさ、あんまり高価なもの使ってないんだけどね」

「いや、そういうんじゃない」

言いながら彼女は、あたしのジャケットの背中へ頬をすりよせ、髪のあいだに顔をうずめてきた。

「女の子の匂い……　っていうのかな。ほんのり甘くて、ふわっと柔らかくて、でもちよつとだけ生ぐさい、みたいな」

生ぐさいってなによ、生ぐさいって。

「なーに言ってるのよ、あんただって女じゃん」

「……」

一瞬、みょうな沈黙があった。

「女の子……だよね？」

答えない。

「ま、まさかニューハーフとか？」

「ひとをオカマみたいに言うな」

「だって……」

「いいから行こうぜ」

「う、うん」

そこで、この会話はいったん打切られた。

頭の中に浮かんだおかしいな妄想を振り払うべく、あたしは愛車やマハ・ビラーゴのエンジンを始動させる。二、三回空ぶかしすると、うおおおんと良い音をさせて、マフラーから真っ黒い煙が吐き出された。バックミラーが少し曲がっていたので調整したとき、鏡越しに一瞬だけ彼女と目が合った。ほんの一瞬の、時計の秒針が、かちつかちつと二回動くくらいのおいだ、あたしたちは見つめ合った。そして不意に彼女は、いたずらを見つけた子どもみたいに目を逸

らし、あわててヘルメットをかぶった。

あたしも、少しだけドキドキした。

排気ガスのおいが、白っぽい微風に巻き上げられてゆく。どこか後ろのほうで、置き去りにされたコーラの空き缶がころころ転がる音がした。エンジンの回転数を上げ、クラッチをつなぐ。目の前の景色が、ゆっくりと後方へ流れだす。そのまま昼下りの怠惰な空気を切り裂いて、バイクは轟音とともにスピードを上げた。

彼女が住んでいるというアパートは、二人が出会った駅から徒歩で十分ほどのところにあつた。バイクだと、あつという間の距離だ。敷金礼金要らずのワンルームマンション。どう見たって、ここで家族と暮らしているとは思えない。タイル貼りの壁から、英語でリバーサイド・シティハウスと銘打った看板が突き出している。リバーサイドねえ……。一応あたりを見回してみたけど、川らしきものなんてどこにもない。

「ここで一人で暮らしているの？」

ゴーストを外し、等間隔にならぶ四角い窓を見上げながら訊ねた。
「……いや」

彼女は、鬱陶しそうにヘルメットを脱ぐと、うなじを隠すていどのショートヘアをぶるんぶるんと振った。ひかえめに茶色く染めた髪が、太陽光線に透けて金色に輝いている。

「姉貴と二人で暮らしてる」

「あ、お姉さんいるんだー」

彼女に良く似た美人のOLを想像して、思わずため息がもれた。
いいな、お姉さんと二人暮らしなんて。

「ちよつと休んでくか？」

不意に彼女がそう訊いてきたので、びっくりして首を横に振ってしまった。

あたしって、バカ。

心の中は、もう彼女に対する好奇心でいっぱいなのに、このまま

別れたくないのに、せつかく彼女のほうから声をかけてくれたのに……。とっさに意思とは正反対の行動をとってしまう。あたしの悪いクセだ。だけど今さら「やっぱり寄つてくー」なんて言えない。お腹を押さえて、うずくまってやるうかな。「あいたたた、とつぜん持病の癩が！」とかなんとか言つて……。

「なあ、名前教えてくれよ。街で逢ったとき、なんて声かけていいか分かんねえし」

「え、あ、うん……。あたし、ゆみ子」

「そっか」

え、それだけ？ それで終わり？ 君にぴったりの可愛い名前だね、とか、ゆみ子ってどんな字書くの？ とか、もつと他にもリアクションあるでしょうに。

「俺、ヨウスケってんだ」

「あ、ずるーい。ちゃんと自分の名前教えてよー」

「……だからヨウスケだって」

「何とぼけたこと言つてんのよ、ヨウスケなんて男の名前じゃん。それともあれ？ あまりにも言葉づかい乱暴だから、男みたいなあだ名付けられたとか？」

「いや違つて。あだ名じゃなくて、本名がヨウスケなの」

「ウソばっか……」

ここでまた、さっきと同じ疑問が頭に浮かんた。もしかして、思いつきりニューハーフとか？

「あなた……って、ひよつとして男性？」

「だとしたら、どうする？」

「……べ、べつに、どうもしないけど」

とか言いながら、半歩ほど後じさる。

でも、どう見たって女の子の体なんだよなあ。乳だつて羨ましいくらいに太つきいし、腰なんて悔しいくらいにくびれてるし、顔も憎らしいくらいに可愛いし。あと骨格もほっそりして華奢だし、喉ぼとけだつてない……。

どっからどう見ても、とびっきりの美少女。

「うむむ……」

考えてみても分からないことは、実力行使、当たって砕けるの精神で強引に調べるのが、あたしの流儀。

「えいつ」

むぎゆ。

右手をのばし、Ｔシャツの上から思いつき乳をわしづかみにしてやった。彼女が驚いて身を固くする

「お、おい、いきなり何しやがる」

「いや、この乳、本物かなーって思っ」

「本物にきまつてるだろ、百パーセント純生おっぱいだ」

「でも最近の医療用シリコンは、なかなか区別つかないくらい柔らかくて弾力があるってゆーから……」

「ひとを、まがい物みたいに言っ」

ただつかんだだけじゃ本当の質感がよく分からないので、ちよつと揉んでみた。

わしわし。

「うーん、微妙な感じね……。手触りは本物っぽいけど、でも形が整いすぎてゆーか、寄せて上げて感がないってゆーか……。ってか、これＥカップくらいあるでしょ？」

「お、おいっ、調子にのってあんまり揉むんじゃねえ。なんか気分出てきちゃうじゃねえか」

「え、感じてるの？」

「ばかやろう。このあま、いい加減にしねえと……」

こうしてやる！ と言って、今度は彼女があたしの首に腕を巻きつけ、もう片方の手で乳をつかんできた。

「きゃあ！ 何すんのよ、この変態」

「うるせー。やられたら、やり返す」

「ちよつとやめてよ、痛いじゃないのよ」

「えーい、じたばた騒ぐな。このポリウム感に欠ける揉みごたえ

はCカップとDカップのあいだってところだな。しかも脇の下の肉まで総動員してる」

「うるさい、うるさい！」

逃れようと懸命にもがくのたが、華奢な体にしてはやけに力が強く、なかなか身をはなすことが出来ない。

「わはは、ヨウスケ様ごめんなさい、ってゆったら許してやるぞ」

「ばか、だれが謝るもんか。ってゆーか、このままあんたの傲慢無礼な乳揉みたおして、大根のべったら漬けみたいに萎れさせてやる」

「おー、やってみる。俺様のおっぱいは永遠に不滅だ」

二人、もつれ合いながらお互いの乳を揉みあっていると、部活の帰りだろうか、ジャージ姿の中学生が三人、あたしたちのことを遠巻きにしながら何ごとかひそひそささやき合ってるのが見えた。気がつくとアパートの二階の窓からも、誰かが首を突き出して興味深げにこちらを見下ろしている。急に恥ずかしくなつて、あたしたちはあわてて身をはなした。

「あぶねーあぶねー。すっかりおめーのペースにはめられちゃったぜ。なんて、くれないじーなヤツなんだ……」

「あぶないあぶない。そっちこそ、見た目可愛いと思って油断したら、危険きわまりない要注意人物だわ……」

ちよつと顔を赤くして、しばらくのあいだ互いに睨み合っていると、突然、彼女の細い肩が小刻みに震えだした。くっくつと、ひきつけを起こしたようにとじた口から乱れた息が漏れ出している。こみ上げてくる笑いの衝動を、懸命にこらえているのだ。あたしもつられて、思わずぶーつと吹き出してしまった。それが合図となり、二人は堰を切ったように腹を抱えて大爆笑した。

「ははははは、は、腹が、腹が痛てーっ。おまえって最高に変なヤツだよ」

「ひーっ、やめてー。苦しくて息ができないよー」

あたしたち女の子は、何でもないことで日々よく笑う。

誰かさんの失敗談、間の抜けた噂話、テレビで仕入れた一発ギャ

グ……。

後で考えると何でもないことが、もう可笑しくつてたまらない。十七才の、今のあたしたちにしか分からない、笑いのつぼ。始動させるスイッチはいたるところに存在し、そしていつも誰かが不用意にそのスイッチを押してしまう。

女の子の体は、つねに笑いたがっているのだ。

ましてや、今日みたいに空が底抜けに青い日曜日なら、なおさら……。

ヨウスケと名乗るその美少女とあたしは、夏の陽射しが降りそそぐ古びたアパートの前で、もう死ぬかと思うほど笑い続けた。ギャラリーたちはあきれて、とつくに姿を消している。

つづく……。

おとこのこ、おんなのこ（後書き）

なんかこの連載ちょっと長くなりそうな予感……。こゆみ先生ごめんね（T―T）

はるよじい（前書き）

更新、遅くなつてごめんなさい……。

はるよいい

りりん。

自宅の部屋の窓に吊るしてある、風鈴がゆれた。

網戸から流れこむ生ぬるい微風に短冊がひらひら踊るたび、心地よい涼やかな音色が部屋の空気をなごませる。

りりん、りん。

闇夜に鼻を利かせ、風のおいをさぐってみる。

むっとするような湿った土の香りに混じって、さざめくような虫のこえが聞こえてくる。かすかに火薬のにおいもある。きつと近所の公園で、子どもたちが花火遊びをしているせいだろう。さあつと風の勢いが強まると、そのときだけどこかの家の茶の間から、野球中継の音声かとぎれとぎれに聞こえてきた……。

心静かに夜風のおいを感じとり、運ばれてくる音色にじつと耳を傾けていると、ほんのり桜色に染まった湯上がりの肌から少しずつ汗がひいてゆく。

あとは、冷えたスイカでもあれば完璧。

頭と体にバスタオルを巻きつけただけのあられもない姿で、あたしは膝や、かかとや、くるぶしのあたりにマッサージオイルをすり込んでいた。きれいな脚線美を維持するためには、日頃のケアがとっても大事。オリーブオイルがじんわり染み込んでゆくに任せ、昼間バイクを乗り回して疲弊した肌が徐々に回復してゆく。もう最高に気持ちの良いひととき??。

けど、頭の中ではぜんぜん違うことを考えてたりする。先ほどからあたしは、自分の携帯電話にせわしなく視線を走らせては、何度も何度もため息をついていた。

……かけてくるかなあ。

今日、別れぎわに、あのヨウスケと名乗る不思議な美少女と、互いの携帯番号を交換しあった。ほんとうに、いかにも話のついでみ

たいに「そのうち気が向いたら電話するから」って感じで聞き出した。そして「じゃあね」と手をふって別れた。もちろん、また会う約束なんてしていない。元々なんの接点もない、赤の他人の二人。交換した電話番号だけが、今のあたしたちをつないでいる。

りりん。

また風鈴がゆれた。

テディーベアのヌイグルミが、少しふてくされた風にそっぽを向いている。その顔に、あの女の子の風貌を重ね合わせてみると、人生思いつきり斜に構えてます、みたいなふてぶてしさが妙に似通っていて、くすつと笑いがもれた。

ほんと、面白い子だった。初めて出会うタイプの女の子。うちのがっこにも面白い子いっぱいいるけど、彼女みたいに、ただ一緒にいるだけでわくわくしちゃう謎めいた魅力にあふれた子ってのは、なかなかお目にかかれない。あの子きつと、なにか秘密を隠してる。あたしなんかの思いもつかないような凄い秘密。

それが知りたい。いや、彼女の何もかもを知って、あ、そういうことだったんだー、って納得したい……。

バイクに乗るとき、ぎゅつとしがみついていた細い腕の感触が、べつたり張り付いてきた胸の隆起が、やわらかな頬のぬくもりが、まだあたしの腰や背中にしつかり刻み込まれている。

また会いたいな。会ってまた二人でふざけ合ったり、バカ騒ぎしたい……。

あたしは、勉強机のはしっこに置かれたピンク色の携帯電話へ、もう一度目をやった。

……かけてこないかなあ。

自分の、それほど豊富ではない人生経験から言わせてもらえば、番号を教えたその日のうちに電話がかかってくればビンゴ！ 相手はかなり自分に好意をよせているとみてよい。逆に今日電話がこなければ、そのまま永久に赤の他人として忘れ去られる可能性大。いざとなれば、こちらから電話してみてもいいけど、でも出来ること

なら彼女のほうからかけてきて欲しい。

……ちくしょう、かけてこいよな！

そのとき、不意に夜空が震えた。

どーんっ、どどんっ。

どこかで景気よく花火が打ち上がったようだ。破裂音が低く轟くと、夜空をみたす弛緩した闇がぐらりと揺らぎ、入れ替わるように虫のこえが静まった。いいね、花火の音って。せっかく巡ってきた夏という季節を目一杯楽しまなきゃ、って気にさせてくれるよ。可愛い浴衣着て、赤い鼻緒の下駄をからこる鳴らして、外を練り歩きなくなる。素敵な誰かと手をつなぎながら……。

妙な空想にひたってしまい、あたしは急にひりひりと喉の渴きをおぼえた。オイルの瓶を置いて、ゆっくりと立ち上がる。スイカは冷えてないけれど、お中元でいただいたカルピスなら冷蔵庫にお行儀良く並んでいるはずだ。

手についたオイルをバスタオルで拭って部屋を出ようとしたとき、突然、携帯電話が鳴った。おおげさな話じゃなくて、あたしはぴょんと飛び上がった。

やったー、きた、きた！

慌てて勉強机に駆けもどる。胸に手を当て、大きくひとつ深呼吸する。そしてヨウスケと名乗るあの女の子の、可愛い顔には似合わないハスキーボイスを素早く想像してみた。

「あ、ゆみ子か？ 俺、昼間バイクに乗せてもらったヨウスケ。もちろん、おぼえてるよな？」

たぶん、こんな感じ。

よし。

うん、と咳払いをして、ゆっくり受話器を耳に押し当てた。

「……はい、ゆみ子です」

ちよつと気取った声が出てしまった。

「あ、ゆみ子。今日は途中でいなくなっちゃって、ごめんねー」

「……なんだ、沙織じゃん」

電話の相手は、ヨウスケではなく親友の沙織だった。急にへなへと膝から力が抜けてゆき、あたしはそのまま勉強机のイスにどさりと座り込んだ。

「なーんだ」

「なーんだとはご挨拶ねー、あれれ、やっぱご機嫌ななめとか？」

「べつにいー、そんなことないけどお」

「ふーん……。あつ、じゃあ、もしかして」

沙織の声がはずんだ。

「だれか良い人からの電話を待ってたとかー？」

「ち、ちがうもん。そんなんじゃないもん」

「こらこら、そんなに動揺してどうする。それじゃ「はい、その通りです」って答えてるようなものじゃん。」

「あれ、凶星だった？」

「ちがうってばあ。もう、へんな勘ぐりしないでよね」

「ごめんごめん。でもさあ、あんたの言ってた、なんだっけ？身を焦がすような運命的な出会いだっけ？そういうの、あたしもちよっとだけ憧れちゃうんだ……」

「なーに言ってるの、あんたにはケンジがいるじゃん」

「ケンジねえ……」

そのとき、受話器の向こうから、そのケンジの間の抜けたような声が割り込んできた。

「なにになに？ 俺のうわさ？ ってか、おまえ今だれと話してるの？」

え、え？ 沙織、今ケンジと一緒になの？ なんで、こんな時間になんて、まさか……ラブホから電話かけてきてるとかーっ。

固唾をのんで耳をそばだてていると、受話器の向こうから沙織とケンジがなにやら言い争いをしながらも、思いつきりいちゃついている様子が伝わってきた。「その電話こっちによこせー」とか「だめえ」とか、妙に嬉しそうな悲鳴が聞こえてくる。途中、「ケンジのえっちー」とか、けしからんセリフも聞こえてきて、あたしはだ

んだん腹が立つてきた。なんだかんだ言ったって、あんたら思いつきりラブラブじゃん！　ってゆーか、それ見せつけるためにわざわざ電話してきたわけ？　この、おたんこなす娘がー。

「……ね、ねえ、もしもし、沙織？　用がないんなら電話切るよ。二人の愛のはぐくみを邪魔しちゃ悪いし」

すると、電話機の奪い合いに勝利したらしい沙織が、早口で言った。

「あ、ごめんごめん。それでね、ゆみ子。じつはあんたに紹介したい子がいるんだけど」

「え？」

思いもよらぬ展開に、ちょっとドキツとする。

「ケンジの中学時代の友だちでさ、大高でサッカー部のキャプテンやつてるスポーツマンなんだ」

「……大高っていったら、秀才ばっか集まるちょー進学校じゃん」

「そうそう。おまけに、めっちゃイケメンで、身長はかるく百八十センチオーバー」

「……」

「あと、親がお医者さんで、本人も医大に入るため家庭教師三人つけて猛勉強中なんだって。ね、まさにサラブレッドでしょ？」

「なんだか悪徳商法のセールストークみたいに良いことづくめの話だ。」

「……そんな凄い子が、どうしてケンジなんかに彼女の斡旋依頼してくるわけ？」

「さあねえ、スポーツマンって意外とウブなんじゃない？　で、なかなか女の子のことを上手に口説けないとか」

「なあるほど」

「会ってみなよ。今度の日曜日。あたしとケンジでしっかりお膳立てするから」

「うふふ、と含み笑いしながら沙織が言った。いきなり降って湧いたような話だけど、でもスポーツに打ち込む男子のひたむきな姿っ

て、嫌いじゃない。ケンジの紹介ってゆーのが、ちょっとしゃくにさわるけど……。

「……まあ、会ってお話するくらいならいいかしんないけど」

「お、やる気まんまんじゃん。上手くいけば、新しいローター買う必要なくなるしね」

「うるせー」

二人して、きやははと笑った。風鈴が、りーんと泣いた。一瞬、ヨウスケの笑顔が浮かんで、なぜだか胸がずきつと痛んだ……。

つつく……。

恋せよおとめ

そういえば、中学のとき付き合ってた彼も、サッカーやってたっけ……。

口べたで、音痴で、勉強が嫌いで、納豆が食べられなくて、容姿は平均点以下……。ほんと、なんの取り柄もないヤツだったけど、でもサッカーボール追いかけてるときだけは、なんていうかキラキラ輝いて見えた。「俺、リフティングの自己最高記録、七十九回なんだぜ」って自慢しておいて、「もし百回連続に成功したら　キスしてくれる？」だって。ふだん口べたなくせに、やけにさりと云ってのけやがって。……けっきょく、それがあたしのファーストキスだったりする。

卒業と同時に別れちゃって、がっこもわりと離れてて、あれから一度も会ってないけれど今ごろどうしてるかなあ。ちゃんと新しい彼女つくって、しっかり青春してるんだろうか。

沙織たちが紹介してくれるという男子が高サッカー部のキャプテンだと聞いて、あたしは中ぼうのときの、あの恋人という存在がいつも近くに寄り添ってくれていた、そんな懐かしい日々のことを思い出していた。

二人ともお金なかったし、あまり遠くへは遊びに行けなかったけど、でもお洒落して近所の商店街ぶらついてるだけで楽しかった。

一日、一日が二人のイベントを中心に動いてて、次の日曜日はどこへ行こう、今度の夏休みは何回海に行けるかな、来月の彼の誕生日には何をプレゼントしてあげよう……なんて考えてるうちに、あつという間に時が経ってしまった。毎日が充実していて、なんかこう、つねに全身にパワーがみなぎってる感じがしてた。ケンカしたときとか、けっこう落ち込んだりもしたけど、でも仲直りするたびにやりいっそう彼のが好きになって、もう二人はずっとこのまま一緒に、喜んだり悩んだりキスしたりしながら大人になってゆくんだ

ろうな、って思ってた。今思い出せば、あのころが一番楽しかった気がする。

やっぱ、女の子は恋してなきゃダメだ。

鼻歌をうたいながらキッチンでカルピスをつくっていると、しゃしゃこと歯をみがきながらパパが近寄ってきた。

「こら、ゆみ子、カルピスはもつと薄めて作りなさい。糖分の取り過ぎは体によくないぞ」

「いいじゃん、いま猛烈に甘いものが飲みたい気分なのよ」

ってゆーか、甘い夢を見ていたいの。

あたしがふんと鼻息を荒げると、パパはすごすごと引き返し、洗面台でがらがらペーっとうがいを始めた。

いい歳して、いまだにママにぞっこんで、あたしの誕生日はすぐ忘れるくせに、結婚記念日には毎年欠かさず豪華なバラの花束を抱えて帰ってくる。そんなちよつと憎い人だけど、食品会社の開発部門につとめてて、いつも食通を自負してるだけあって料理を作るのがとっても上手。あたしは子どものころからママの作るご飯より、日曜の晩にだけ作ってくれるパパの手料理のほうがだんぜん好きだった。盛り付けがちよつと気取っているけど、思いつきり気合を込めて作っているだけあって、すごく美味しい。たまに外食すると店の料理口にしながら、あーでもない、こーでもないってウンチクたれるのが少しウザイけど、でもあたしのつくる料理の味って、たぶんパパの味……。将来お嫁に行ったとき、旦那さまから「君のつくる料理は美味しいね」って褒められたら、それはきつとパパのおかげだ。

その彼が、タオルで顔をがしがし拭きながら再び近づいてきた。

「ゆみ子ー、パパのこと尊敬してるかー？」

はあ？ この人は、突然なにを言い出すのやら……。

グラスの氷をかちやかちやかき回しながら「べつにー」と少しふてくされて見せると、「そうか、尊敬してないのか」と言って右手を小さく振ってみせた。その指先には、なんと一万円札が……。

「パパ大好きー、あたしの自慢のお父さん、将来はぜったいパパみたいな素敵な人と結婚するー」

「よしよし」

なにが、よしよし、なのかよく分からないが、彼はたまにこうやって臨時のお小遣いをくれる。友だちに聞くと、わりとどこの家庭でも同じらしく、元来父親というものは、娘にお小遣いをあげることを秘かな楽しみにしているらしい。

とにかく大事なデートを前に、金銭的なピンチは切り抜けられた。パパ、さんきゅー」

右手にカルピスのグラス、左手に真新しい一万円札をひらひらさせながら階段を駆け上ってゆくと、下からちよつと照れた感じのパパの声が追いかけてきた。

「あんまり変なもの買っんじゃないぞー」

あーっ、ママのやつ、パパにしゃべったなー！

少し憤慨しながら部屋に戻ってみると、携帯電話のLEDが点滅していた。どうやらあたしが留守にしているあいだ誰かが電話してきたらしい。すぐに履歴をチェックすると、リストの一番上に、ヨウスケの名前があった。

やった、かけてきた！

あわてて表示された番号へそのままダイヤルする。すぐにスピーカーの向こうから、ちよつと戸惑った感じの女の人の声が応じた。……はい。卯月ですけど」

あれ？ ヨウスケの声と違う。ひよつとして電話番号間違えたかな？ いやいや、かかってきた番号に直接コールしてるから、そんなはずないし……。

「ヨウスケ……じゃない、ですよね？」

当惑しながら訊ねると、少しの間を置いて電話口の向こうから、なにやら安堵するようなため息が聞こえた。

「……ああ、ヨウスケのお友だちだったのね？ ごめんなさい、電話帳のリストに見知らぬ番号が登録されていたものだから、だれだ

ろうと思って一応確認してみたの。夜遅くに、ほんとごめんなさいね」

あつ、じゃあこの人がヨウスケのお姉さん。あいつ自分の番号じやなくてお姉さんの電話番号あたしに教えたんだ。ひどいやつ……。

「あ、はじめましてえ。ってゆーか、こちらこそ、ごめんなさい。あたし、てつきりこの番号がヨウスケの携帯電話のものだとばかり思ってた……」

「ううん、いいのよ。二人で同じ電話機を使っているんだもの」

へー、今どきめずらしい、そういう格安料金プランがあるのかな？　ちよつとセコい気もするけど……。

「いま、ヨウスケに代わるわね」

「あ……」

今日はもう遅いから明日の朝またかけ直します、って言おうとしたのにー。でも声が聞きたいのも、これまた事実。少しわくわくしながら待っていると、わずかな間をおいて、あのハスキーボイスが電話口から聞こえてきた。

「あ、俺だよ、おれおれ」

なにが、おれおれ、よ。振り込め詐欺かつーの。

「今日は、お前のおかげでマジ助かったよ。さんきゅーな」

「さっそく電話してくるなんて、可愛いとこあんじゃん。さては、あたしに気があるなあ？」

「まあ、ないって言えば嘘になるけどね」

え、まじで？

「ところでよ、俺ちよつと臨時収入があつたんだ。で、お前になにかお礼がしたくてさ……。今週の日曜日って空いてるか？」

「ごめん、今度の日曜は……ちよつと」

さすがにデートだなんて言えない。せっかくヨウスケのほうから誘ってくれたのに、なんてタイミングの悪いこと……。

「そうか……残念だなあ。俺、お前に最高に美味しいラーメン食わしてやろうと思ってたのに」

このくそ暑いのにラーメンは、……ちよつと遠慮したいです。でも残念そうなヨウスケの声聞いていると、なんだか切なくなつた。

「あ、でも、午前中少しくらいなら会えるかも」

「いいよ、別に無理しなくても」

「ううん、会いましょう。じゃないと、なんかこのまま一生会えなくなりそうなのがして……」

「ははは。女の子って、突然おセンチなこと言い出すから困るんだよな」

なに言ってるの、自分だって女のくせに。

「じゃあ駅前に十時ってのはどうだ？ ラーメンは無理かしんねーけど、自販機の缶コーヒーくらいならおごつてやるよ」

「せこ??。せめてスタバくらい連れてってよね」

「分かった。じゃあスタバのチョコレートマフィンで手を打つてくれ」

「おっけー」

じゃあ日曜の十時な、って言つて突然電話は切れた。なんて、せっかちなヤツ……。でもおかげで日曜日の楽しみが二倍に増えた。ちよつと二股かけるみたいで心苦しいけど、でもかたや初対面でまだ付き合つかどうか決めてないし、かたや女の子だし、まあいいかって感じ。

ああ、なんか今夜はわくわくして眠れそうもないなあ、って思つてたけど、冷たいカルピスのどに流し込んで、部屋の明かりを消したら、そつこーで意識が夢の世界へと飛んだ。ものすごく寝付きがいいのも、あたしの取り柄だったり……。

つつく……。

うっそー！

ほっぶ、すてっぶ、じゃんぶで、はずみをつけて水たまりを飛び越えると、制服のスカートが風をはらんでふわっとひるがえった。一瞬だけ水面がきらつと輝く。今朝はなんだか調子がいい。心も体もやけにはずんでいる。パワーがみなぎっている。もうゼンマイを目一杯巻いたチヨロQみたいに、五体がエネルギーのはけ口をもとめて張りつめている。

ああ、久しく忘れていたこの感覚……。心のなかに誰かが住みついている。誰だろう？ ひょっとしてヨウスケ？ って、まさかね。たぶん今度の日曜日に出会うはずの、沙織たちが紹介してくれるというサッカー青年に違いない。まだ見ぬ人だけど、でもサッカーやってるってことで、中学のとき付き合ってた恋人とイメージが重なってしまった。同時に、恋愛しながら過ごしてきたあの切なくて甘ったるいような日々のが胸によみがえり、過去の思い出と未来への期待がごちゃまぜになって、勝手に新しい恋人のイメージを作り上げてしまったのかもしれない。

とにかく予感だけはするのだ。

なにか、とてつもなく素敵な恋がはじまるような、そんな予感が……。

最近覚えたてのラブソングをふんぶんハミングしながら、早朝の横断歩道を渡っていると、不意に背後から声をかけられた。

「よっ、今日はいつも増して、ごっ機嫌みたいじゃーん。なにか良いことでもあったのかなあ？」

ふり向くと、沙織が腰に手を当てて、にやにやしていた。

あの顔ってぜったい、あたしをおちよくろうとしているときの顔。

あたしは、すっとぼけた表情で小首をかしげて見せた。

「何のことお？」

すると、あんのじょう、

「危険な恋の予感に、わくわく、ときどき、ってかあ？」
なーんて言ってきた。

まったくもう、この子ってばいつもこうなんだから。

でも、だいじょうぶ、ほんとに楽しい気分のとぎつて心にもゆとりがあるから、少しくらいからかわれたって、へっちゃら平気。あたしは余裕しやくしやくの表情で、あっかんべーしてやった。

「びーっ」

「あれま」

あたしが思いどおりの反応をしめさないものだから、沙織はちょっと拍子抜けした顔をして、それからすねた目で空を見上げた。

「なーんだ、つまんねーの」

それは悪うござんしたね。

未明に少し雨が降ったせいで、風が薫っている。なんていうか、洗い立てのシーツみたいな香り。吸い込むと、鼻の奥に心地よい刺激がつんと突き上げてくる。そんな爽やかな風を頬にうけて、あたしは沙織と肩をならべ通学路を歩きだした。水たまりに映りこんだ雲の動きがやけに緩慢で、その青い空のなかをアメンボが気持ちよさそうに滑空している。あたしは、もう一度水たまりを飛び越えようと身構えて、沙織に腕をつかまれた。

「ちょっと止めなさいよ、子どもじゃあるまいし」

「いいじゃん、ジョイナーやらせてよ」

「だめだめ。もしあんたがヘマをして水たまりの上に着地したら、あたしまで水かぶるんだからね」

沙織は、丸襟の真っ白いワンピースを着ていた。もちろん、あたしだって同じかっこう。襟元と袖口のところにマリンブルーのラインが入っていて、左胸には高校のエンブレムが刺繍されている。つまりはこれが、うちのがっこの夏服というわけ。どこにでもあるような私立の女子校なのに、どういうわけか制服がとってもお洒落。べつにお嬢様学校と呼ばれるようなところではないし、大学進学率

も中くらい、スポーツもとくに強いというわけじゃなく、ほんとなんの特徴もない私大の付属高校なんだけど、なぜか制服のデザインにはこだわりがあるみたいで、県内でも珍しい純白のワンピースを採用している。……でも、こういうのってなんか良い。あまり欲張らず、なにか一つだけ、たった一つだけでいいから、他の学校にはないような輝ける部分を持っている。あたしも沙織も、この制服に憧れてうちの学校を選んだ。ちなみに襟と袖口にあるワンポイントのラインは、入学年度によって、赤、青、緑と色が分かれていて、その色を見分けることによって何年生なのか判るようになっていて。今年の新入生は緑、そして先輩たちは赤といったぐあいに。

学校が近づくにつれ、同じ制服を着た女の子たちの数がしだいに膨らんでゆく。夏の初めの月曜日、楽しさと気怠さが同居するなか、大人と子どもの境目を生きる彼女たちの顔に、底抜けの明るさはない。みな、笑顔の裏に何かしら悩みをかくしている。はやく大人になりたくて思いつきり背伸びしてるくせに、その一方で大人社会に対して意固地で感傷主義的な反感も抱いている。ゆらゆら揺れ動くあたしたちの精神は、いつだってすっごく不安定。

そんなことを考えながら、校門に吸い込まれてゆく生徒たちの姿をぼんやり眺めていると、一人の女の子の顔があたしの目に飛び込んできた。

「えっ」

あれって、もしかしてヨウスケ。

うっそーっ！

一瞬、自分の目を疑った。

でも間違いない、あのオリエンタルで、コケティッシュで、ミステリアスで、存在感抜群の美少女って、ヨウスケの他にはいない。

校門の内へと流れ込んでゆく生徒たちの一団に見え隠れしながら、彼女はゆっくりと歩いていった。周りの友人たちと楽しそうにお喋りしている。ときおり真っ白い八重歯を覗かせて、ころころと気持ち良さそうに笑っている。お洒落にカットされたショートヘアが、校

舎の屋根をかすめる朝日にぼんやり透けて輝いている。制服のワンピースなんか着ているせいで昨日とは少し雰囲気違って見えるけど、掃きだめに鶴つてゆーか、イモくさい高校生の中にあつて、一人だけアイドル歌手のように眩いオーラを放っている。あんな目立つやつて他にいない。ぜったいに見間違えるわけがない。

驚いた　彼女が、同じがっこの生徒だったなんて。しかも赤いラインの入った制服着てゐるってことは、あたしの先輩？　まじっすか？　信じられないよ、あのやんちゃで子どもっぽい言動から察するに、てっきり年下だと思つてたのにーっ。

「……ちよつと、ゆみ子？　どうしたの？」

急に立ち止まったあたしに驚いて、沙織が横から顔をのぞき込んだ。

「なんか忘れ物でもした？」

はつと我に返り、ゆつくりと首を振る。

「え、いや……、違うよ」

「じゃあなによ。？？あつ、分かった、新しい恋愛を始める前に、もう一度自分という人間を根本から見つめなおしてみる気になったのね」

「んなわけないでしょ」

言いながら、あたしは走り出していた。

「ごめん、あたしちよつと先行くね」

「あれ、なによ、トイレなら付き合つしい」

「違つてば」

「ちよつと待つてよー、親友を置き去りにする気ー？　かむばーっく、まいふれーんど」

追いすがろうとする沙織に、

「まじ、ごめん」

と誤つておいて、あたしはヨウスケがいたあたりへダッシュした。なによあの子つてば、妙に意味深な態度とつてたくせに、女子校通つてゐるってことは思いつきり女の子じゃん！　もうこつなつたら、

ぜつたい本名聞き出しちやる。

そのとき不意に、背後からぐつと腕をつかまれた。

「ちよつと沙織やめてよ、今だいじな用があるんだからあ」

少し怒った顔で振り返ると、沙織のかわりに、グレーのスーツを着たひよろりと背の高い中年女性が立っていた。白髪染めの行き届いた黒髪をアップにして、細い縁なし眼鏡をかけている。あごの尖った逆三角形の顔が、昆虫界の残忍なハンター、カマキリを連想させる。彼女こそは現代国語の教諭にして我が校の生活指導担当、オールドヒステリーの大山教諭であらせられる。うちのがつこで教鞭を振るう先生たちの中で、あたしがもっとも苦手とするおばさんなのだ。

「お、大山せんせ、おはようございますう。あたしに何か用ですかあ？ 今ちよつと急いでるんですけど、一時限目の予習とかしなくちやいけないしい」

「ウソおつしやい！」

「ほんとですう、まじ急いでるんですう、お願い、行かせて」

なんとか彼女の手をすり抜けて再び走りだそうとすると、今度はぎゅつと耳を掴まれた。

「痛でででででで、痛ででで」

「待ちなさいって言ってるでしょ」

「せんせ、ひどいですう、年頃の娘の顔になんてことするんですかあ、耳が広がってダンボみたいな面相になったら、もうお嫁に行けなくなるじゃないですかあ」

あたしが涙目になって抗議すると、大山教諭は、きつついバリ系の香水の匂いをぶんぶんさせながら、ふんと息巻いた。

「あなたは普段から授業もちゃんと聞いていないのだから、少しくらい耳が広がっていたほうが具合が良いのよ」

「せんせ、そんな言い方ってあんまりですう」

「そんなことより……」

こちらの抗議には耳を貸さず、彼女は陰険なカマキリ顔をぐぐつ

と近づけてきた。あたしは、思わずびくつと肩をすくめる。

「あなた、昨日のお昼ごろ、駅前通りでオートバイを走らせていたわね？」

「き、き、昨日ですかあ？ 昨日はたしか朝から両親と祖父のお墓参りに行ってたような……」

「何言ってるの、あなたのお爺ちゃん、まだお元気でしょ！」

しまった、祖母と言えばよかった……。

「あなた、ヘルメットかぶらないままオートバイに二人乗りしていたわよね？」

うわあ……、最悪だあ。返答に窮してあたしが目を泳がせていると、背後から沙織が追い抜いていった。

「あたし先行くねー」

「ちよつと待ってよー、親友を置き去りにする気ー？ かむばーっく、まいふれーんど」

どさくさにまぎれて沙織のあとを追おうとしたけど無駄だった。獲物を捕らえたカマキリのごとく、大山教諭の骨張った指はあたしの腕にしっかりと食い込んでいる。

「いいですか、そもそも我が校は生徒たちの自由な気風を尊重するために運転免許の取得にも寛容なのです。けれどもそれは、交通法規を遵守するという大前提のもとに我が校の生徒として恥ずかしくない社会秩序を……」

哀れ??、朝から、なーんか良いことあるんじゃないかなーなんて気がしてたけど実はそうでもなかった不運な女の子は、それから一時限目の予鈴が鳴るまで、延々と生活指導先生のねちっこい説教を聞かされるのであった。

もちろん、ヨウスケの姿はとくに校舎のなかへと消えている。

つつく……。

うっそー！（後書き）

更新遅くてまじごめんなさい。反省してます。せめて週一更新できるように努力したいと思います。こゆみ先生も『電車通学』の連載がんばってー！

卯月せんばい

「むかし、たむらのみかどと申すみかどおわしましけり。そのときの女御たかきこと申すみまそかりけり。それうせたまいて……」

一時限目の授業は、古典だ。

正直、あたしたちの将来において、これってなにかの役に立つの？ みたいな退屈度ナンバーワンの教科。せつかくの爽やかな朝の目覚めがもう台無しって感じで、とにかく眠いことこの上ない。教室内を見渡してみても、イスに座ったままこっくりこっくり船を漕いでる子や、なかにはネムリヒメの美樹みたいに、堂々と机に突っ伏して爆睡してる強者までいる。かろうじて起きてる子だって教科書のかげにかくれてマニキュア塗ってたり、コミック読んでたり、ぼんやり窓の外を眺めながら物思いに耽っていたり。もう在原業平なんて、ぜんっぜんお呼びじゃないって感じの気の抜けた授業風景。かく言うあたしだって、上の空で考えことをしてたりする。

ヨウスケのこと。

同じがっこの生徒だったなんて思いもよらなかった。あんな不思議オーラを放つ美少女が、同じ校舎のなかで、同じ制服着て、一緒に学校生活を送っていたなんて、今まで気づきもしなかった。まあ学年が違ってたのもあるんだろうけど……。でも昨日知り合ったばかりの子と再びがっこの前でめぐり会えるなんて、ほんと世の中ってせまい。十七才にしてそんな達観するようなこと言っのやだけど、まじでそう思った。

「……そこばくのささげもの木のえだにつけて、堂のまえにたてたれば、山もさらに堂のまえにうごきいでたるようになむ見えける」

古典担当の金田一先生が、眠気にさらに拍車をかけるような心地よいバリトンボイスで、伊勢物語の一節を読み上げている。横溝正史の小説に出てくる同姓の探偵よろしく、鳥の巣みたいなヘアスタイルをした三十代なかばの男性教諭だ。授業に熱が入るとそのぼさ

ばさ頭をかきむしるクセがあるので最前列の子なんかはちよつと警戒してるけど、意外にも毎日きちんと洗髪してるらしくて映画みたいにフケが飛び散るということはない。ただ見た目がなんて言うか、とっても貧相。顔は栄養失調おこしたナマズみたいだし、いつも眠たそうに目をしょぼつかせている。うちのがつこの男性教諭って、どうしてこうルックスのイケてないヤツばかりなんだろ。やっぱ生徒と色恋沙汰なんか起こされちゃ困るので、わざと外見しょぼい人ばかりを採用してるのだろうか……。

「あー、ここんとこ試験に出るからな、よく聞いておくように。えー、右大将に、いまそかりける、藤原の、常行ともうす、いまそかりて……」

その冴えない金田一先生があたしたちに背を向けて、かつかつと黒板にチョークを走らせはじめた。少し右上がりの、ちまちました神経質そうな文字がならぶ。あーあ、だるくてノートなんか取る気になれないや……。あつそうだ、携帯で黒板をまるごと写真に撮ってしまおう。そうすればノートへ書き写さずに済むしね。うん、あたして天才。

そう思いついて制服のポケットから電話機を取り出したとき、手のひらのなかで発光ダイオードが点滅した。

およよ。

音を立てないようそつとディスプレイをひらいてみる。画面いっぱいに紙ヒコーキのイラストが浮かび上がった。

新着のメールが一件あります。

だれだろう？

目だけで教室内を素早く見回し、このメールの送り主を探してみる。でも相変わらず気持ち良さそうに熟睡してる美樹は論外としても、沙織はさつきから仏頂面で教科書に落書きしてるし、いつもメールでちょっかいかけてくる愛子はボーイスラブのコミックを読むのに夢中だ。他にメールしてくるような子っていたっけ。

うーむ……。

とりあえずメールの中身を確認してみた。

ゆこちゃん、昨日のお昼ごろ卯月先輩と一緒にいたでしょ？
あたしのことを、ゆこ、って呼ぶクラスメイトは一人しかない。
窓ぎわの一番後ろの席にすわってる、チャコちゃんを見た。ポパイ
に出てくるヒロインのオリーブみたいに、ひよろりと背の高い女の
子。彼女はあたしと目が合うと、いたずらっぽい視線でウィンクし
てきた。

そして、ふたたびのメール。

卯月先輩とけっこう親しいんだね

だれそのひと？

あれ、知り合いじゃないわけ？

もう一度、チャコちゃんのほうを見る。シャンプーのCMに出て
くるようなさらさらした長い髪を揺らして、不思議そうに首をかし
げている。

あつ、そう言えばヨウスケのお姉さんが、たしか自分のことを卯
月って名乗ってたっけ。とゆうことは、ヨウスケの苗字も卯月なん
だ。ウヅキヨウスケ……。なるほどね。でもチャコちゃん、どうし
てヨウスケのこと知ってるんだろう？

チャコは、ヨウスケと知り合い？

すぐに返事が来た。

ヨウスケなんて知らないよー、だれそれ？

ああ、メールだと、まどろこしくてイライラする。はやくこのく
そつままない授業終わんないかなあ。そう思った瞬間、金田一先生
がくるつとこちらを振り向いた。そして手についたチヨークの粉を
こすり落しながら、教室内を睥睨しはじめる……。

「えー、じゃあこの問題、誰に答えてもらおうかな……」

あたしって、こういうとき決まってドジを踏む。おとなしく下向
いてりやいいものを、ぐるーり生徒の顔を見回す先生とばかり目
が合ってしまった。

「お、よしっ井上、答えてみる」

「げっ」

あんのじょう指名されて、イスの上でのけぞる。やばいぞやばいぞ、ぜんぜん授業なんて聞いてなかったぞー。

「……えと」

質問に答えられずもじもじしていると、先生がその鳥の巣みたいな頭をぐしゃぐしゃ搔きむしりながらつめ寄ってきた。

「うん？ どうした井上、いまそかりの活用形だぞ、はやく答えろいま……そかり？ ってなんだっけ？

「え、えーと……」

冷や汗をにじませながら、どっかに答え書いてないかなー、なんて教科書の上に視線を泳がせていると、また携帯電話のLEDが光った。今それどころじゃないのに……。でも発信者のメールアドレスが沙織のものだと知って、ほっと安堵の息をつく。助かった、神さま、仏さま、沙織さま……。先生にばれないよう注意しながら、そつとディスプレイを盗み見る。

ばーか、らぎようへんかくかつよう、にきまってんじゃん沙織って見かけによらず、秀才だったりする。

「はい、えつとお、ラ行変格活用です」

「よし正解。じゃあついでに、同じラ変のなかで、侍り、の未然形を言ってみる」

あわてて、ふたたび携帯へと視線を戻す。

はべらむ

と書いてあった。

「侍らむ、です」

「……うん、まあ、ちゃんと予習しているようだな」

頭を搔きむしるのをやめて、先生はふたたび黒板へと向きなおった。沙織に向かって手を合わせ、感謝の意を伝える。彼女は形の良いい鼻をつんと突き上げ、あんなの答えられて当然でしょー、みたいな顔をした。

彼女は、ほんととはもっと偏差値の高い高校へ行けたはずなのに、

あたしや美樹や愛子たちと一緒にこの学校を選んだ。ケンジみたいな本物のおバカと付き合ってるせいで無理にレベル合わせて自分もバカっぽい言動してるけど、彼女の部屋には、あたしなんかじゃとても読みこなせないような分厚い哲学書が何冊も並んでいる。一度だけ、世界史の野口教諭と一神教について熱く論じあっている様子を見かけたことがあるけど、スピノザとか、汎神論とか、アニミズムとか、あたしの十七年間の人生では一度だって登場したことのないような難しい単語がぼんぼん飛び出してきて驚いた記憶がある。

彼女の夢は、昔も今も変わらない。

報道カメラマンになってインドのドラムシャーラーとかいうところへ行くこと。そしてそこでチベット亡命政府の長、ダライ・ラマ十四世に会うことだ。

古典の授業が終わり、その沙織が両手を高く持ち上げてうーんと伸びをしながら、あたしの席までやってきた。

「金田一に指されるなんて、あんた要領わるすぎー。あいつは自分と目が合ったやつしか当てないのに」

「あはは、さんきゅー、おかげでまじ助かったよ」

「じゃあ今日はひとつカレー味ということで、よろしく」

「……ほいほい」

じつは沙織に授業中助けてもらうと、一回につき学食でミニカツプ麺を一個おごらなければいけない。いつの間にか、そういうルールができてしまった。若くして宗教や哲学なんかに造詣が深いくせに、ちゃっかりしてるってゆーか、ほんと現金なやつなのだ。

彼女と無駄話しながらのろろの教科書を片づけていると、後ろのほうから名前を呼ばれた。見ると、のっぽのチャコちゃんが黒髪を揺らしながら近づいてくる。

「あのね、さっきの話のつづきなんだけど……」

あつ、そうそう、彼女にヨウスケのこと訊くんだった。

「うんうん、ヨウスケのことね？」

「……じゃなくて、ゆこちゃんが昨日会っていた、卯月先輩のこと」

「まあ、どっちでも同じなんだけど……」

苦笑いするあたしに、沙織が不思議そうな目を向けた。

「なにに、なんの話？ ヨウスケ？ ウヅキ？ だれそれ？」

「ごめん沙織、後で話すから」

そう謝っておいて、チャコちゃんのほうへ向き直る。

「でさ、チャコ。その卯月先輩って、下の名前なんてゆーか知ってる？」

そう訊ねると彼女は隣の机に寄りかかって、長い黒髪の毛先を指でくるくるもてあそびながら言った。

「名前は、そうねえ……千里。うん確か、うづきせんり、だったよ。千里の道も一歩から、の千里じゃないかな」

よっしゃ、ヨウスケの本名ゲット。あいつ、卯月千里っていうんだ。

あたしが感慨深げに何度もうなずいていると、チャコちゃんは急に声をひそめて囁いた。

「……でもね、あのひとつて、なんかヤバいらしいんだ」

つづく……。

胸騒ぎ……

ふわり、教室のカーテンが揺れる。

ほどいて風になびかせた少女の髪の毛みたいに。

はた、はたと、白いナイロンの生地は、窓から入り込む夏の気だるさを受け流して、大様にひらめく。

やわらかな風がふわっと鼻先をなでてゆく。匂いを感じる。

校庭から流れ込む土の香り、草木の瑞々しさ、かすかな漂白剤と、それから誰かさんの香水の匂い……。

ふわ、ふわり。

ざわり。

同時に、あたしの心にも小波が立った。

「そのヤバいつての……ちょー綺麗とか、ちょー憧れちゃうとか、そういう意味での、ヤバい？」

「うっん、違うよ。ちょー危ないとか、ちょー関わりあいにならないほうがいい、みたいな、ヤバい」

チャコちゃんは大まじめにそう言って、あたしの目の奥をちらつと覗き込んだ。

うむむむ……。

たしかにヨウスケって、雰囲気ふうじゃないところがある。なんて言えばいいのかな、野性的というか、デンジャラスというか……、そう、まるで自由にサバンナを駆けて獲物を狩る肉食獣みたいなしなやかさと奔放さを備え持っている。てつきり飼い猫だと思っ
て抱き上げたら筋金入りの野良で、なにするんだよー、って暴れられて、顔や腕を引っ掻かれてしまう。そんな感じ。

でも、それってヤバいつてゆーのとは少し違う気もする。

昨日、ほんの数時間だけ一緒に過ごしたけど、彼女からはいわゆる不良の匂いみたいなものは嗅ぎ取れなかった。ただ自由気ままに天真爛漫に、自分の思うがままに行動している。それだけ。そこに

性悪な攻撃性やすさんだ人生観などは感じられない。

具体的にどうヤバいんだろう……。

「ねえチャコ、それってどっち方面からの情報よ？」

「うちの姉貴方面」

「ああ、ネネさん……。あれ、ひよつとしてヨウスケってか卯月先輩、ネネさんと同じクラスなわけ？」

「そうだよ。中ぼうのときも同級生だったし、今も一緒のクラス」
チャコちゃんには、ネネさんという年子の姉がいる。高校も一緒で、つまりはあたしたちの先輩。

余談だけど、彼女たちのパパは若いころ太閤記の大ファンだったらしい。だからもし自分に子どもが生まれたなら、男ならば秀吉、女には寧々と名付けようと固く心に決めていた。でも子ども名前を親の趣味で決めてしまうなんて、ずいぶんとはた迷惑な話だ。寧々はまあ良いとしても、秀吉なんて名前付けられた子どもって、かなり不憫だと思う。まあ幸いにして生まれてきたのは二人とも女の子だったけど、でもチャコちゃん、あやうく茶々という名前を付けられるところだった。茶々ってゆーのは、もちろん太閤秀吉の側室、淀殿のこと。けっきょく夫婦ゲンカのすえ折中案として茶子に落ち着いたんだけど、でもたまにカラスと読み違える子がいて、そんなときは未だにちよつとだけ親を恨むって愚痴をこぼしていた。

そのチャコちゃんが口重に語りはじめた。

「なんかね、卯月先輩って中学のときは学校へ来たり来なかったりを繰り返してたんだって。だけど登校拒否ってゆーのとはちよつと違うんだな。とくにイジメにあってたわけじゃないし。なんて言うか、もつと深刻な事情ってゆーか、ワケアリっぽかったみたい」

「それって単に病弱だったとか……」

「違う違う、いたって健康、スポーツ万能、一時は陸上部に席置いてて、インターミドルの県予選を上位通過したこともあるって。でもね、中学三年のときだったか、二ヶ月ほどまったく登校しなくなったことがあって、そのときは京都にある医療少年院へ入れられ

たつて噂流れたみたい。先生たちも彼女のことは、まるで腫れ物にさわるみたいに扱ってたらしいよ」

医療少年院……、それってちよつと穏やかじゃないな。

「それとね、ここへ入学したばかりのころの話なんだけど、卯月先輩、恐い上級生たちに目え付けられて便所へ連れ込まれたんだって。ほらあの人ってルックスちょー可愛いじゃない。普通にしてても、やっぱ目立つっちゃうらしくってさ」

たしかにヨウスケって目立つ。それは外見のケバケバしさとかじゃなく、存在そのものの輝きが自然と人目を引いてしまうのだ。例えて言うなら、造花をたばねたブーケのなかに、一輪だけ生きた本物のバラがまじっている。だれが見たって、その一本だけ瑞々しさが違う、美々しさが違う、命の輝きが違う。だから女の子はみんな彼女を見て、まず憧憬し、やがて嫉妬心を芽生えさせるのかもしれない……。

「でもさ、美人の後輩をいじめるなんて情けない先輩たちだよ。まるで自分はブスだから面白くなってやってるんです、って喧伝してるようなものじゃん」

「まあそうなんだけど……、でもね、姉貴たちが慌てて先生呼びにいつて戻って見たら、上級生たちみーんな鼻から血い流して便所のタイルの上にうずくまってたんですって。で、当の卯月先輩はってゆーと、洗面台んとこで涼しい顔して手に付いた血を洗い落としてたって……」

一瞬、頭のなかでヨウスケの精悍で美しい顔が、にやりと笑った。あいつならやりかねない。不良の先輩たちを叩きのめすなんて朝飯前だろう。なにせ電車のなかで痴漢の指をへし折ったくらいだから。「うちの姉貴もさ、あの人とは一応友だち付き合いしてるけど、やっぱそれなりに距離は置いてるみたい。なんか一緒にいると、ときどき恐くなることがあるんだって」

「恐い……って、どんなふうに？」

「ふだんはもの静かなんだけど、なにかの拍子に突然、豹変するの。」

キレるとか癪癪起こすんじゃないかって、まるで人が違ったみたいになっちゃったのよ、ほら、ジキルとハイドって話あるじゃない。あんなふうにならないうちに」

ざわり。

心のなかで無数の蛾が羽ばたくように感情がうごめいた。すごく苦いものを飲み込んだときののように胃がきゅっと縮み上がる。

なんだろう、この胸騒ぎ。さっきまで、あんなにハッピーだったのに、心が萎縮して、しょげかえっている。ヨウスケのことが、だんだん分からなくなってきた。お腹に力が入らない。なんだか……息も……くるしい。

と思つたら、だれかに後ろから首を絞められていた。

「ぐ、ぐるじい……、ちよつとやべろ」

必死に指をふりほどいて涙目で振り返ると、美樹が真っ白い歯を見せて笑っていた。やけにアイラインを強調したメイクが、まるでエジプトの壁画に出てくる女王様を思わせる、ちよつとエキゾチックな美人だ。

「なーに深刻な顔してヒソヒソやってんのよ？ あー、さては、ゆみ子お、あんたもしかして……」

「……な、なによ」

「ハラんだわね！」

「ばっ、ばかなこと言わないでよ、彼氏もいないのにどーやって孕めるってゆーのよ、あんまり危ないこと言わないでよね」

「きやはは、ばーか冗談よ」

美樹はネムリヒメの異名を持つだけあって、授業中のほとんどの時間を夢の世界で過ごしている。その眠りっぷりは見事なもので、まるで充電中の家電製品みたいにひっそりと、しかし確実にエネルギーをため込んでいる。居眠りのしかたも巧妙で、古典の金田一みたいに注意しない先生ときには堂々と机に突っ伏すけど、数学の前田のようにうるさいやつは授業では、あたかも頼杖ついて教科書と睨めっこしているふうを装って、目立たないようこんこんと眠り

続ける。とにかく授業中はひたすら眠っているのだ。そのおかげで休み時間になると元氣百倍、勇氣凜々、迷惑千万、妙にテンションが高くなり、うるさいことこの上ない。

「妊娠したんじゃないとしたら、なに真剣な顔して悩んでんのよ？

ねーねー、教えるよあ

「ぜひ、あたしも聞きたい」

沙織が腕を組んで、美樹に同調する。

「え、だれだれ？ だれが妊娠したって？」

そこへ、ボーイズラブのコミックを読み終えた愛子もやって来て、三人であたしを取り囲むかたちとなった。

「だからー、妊娠したとかそーゆーあぶない話じゃなくって」

仕方ないなあ、もう……。

チャコちゃんと目を合わせてくすつと苦笑いしてから、あたしは三人の友人に向きなおった。昨日出会った不思議な女の子、ヨウスケのこと、とても美人で、謎めいている、その彼女の話を、順を追って聞いてもらうことにしたのだ。

つづく……。

胸騒ぎ……（後書き）

チャコちゃんのモデルは、トコという人で、作中のキャラと同じ十七歳です。でも髪は茶髪で、しかも少し発酵してるかな（笑）。チャコちゃんのほうは、黒髪がきれいな背の高い美人だもんね……。

初歩的なミス

知らない誰かさんの人となりの説明するのって難しい。

ましてやあたしのように、いつも思いつくまま直感的にコミュニケーションプロセスを踏んでる人間ならば、なおさら……。

自分としてはヨウスケのことを個性的で、神秘的で、きらきらまぶしくて、なんだか謎めいていて、すごく素敵な子だなんて思っているのに、そのことを上手く表現できない。ちょー可愛いとか、めっちゃ面白い、だなんて乏しいボキャブラリー駆使しようとするばするほど、彼女のことがチープに伝わってしまう。もう、はがゆくて、もどかしくて……。

あたしは苦心惨憺、大汗かいて熱弁ふるったつもりだけど、それに対する沙織たちの反応は冷ややかだった。

「なーんだ、ようするに見た目可愛いってだけの、たんなる暴れん坊じゃん」

「つーか、なんかヤバくねそいつ。自宅のベランダで大麻とか栽培してね？」

「もしかして、あんたレズっ気あるでしょ？ うわー、ちょーあぶのーまる」

あたしは、へなへなと脱力してなめくじみたいにべったり机にはり付いた。

「……もう帰れよ、お前ら」

「だってさ、今の説明聞いたかぎりじゃそのヨウスケって子、顔は可愛いけど、がさつで乱暴者で、おまけに得体の知れないところがあるってゆー、ちょっとイタイキャラなわけじゃない？ どう考えたって、あんたが言うほど魅力的とは思えないんですけど」

「そうそう、だから何よって感じ。ルックスさえ良ければ人生それでいーのかい、みたいな」

「男は度胸、女は愛嬌を地でいくような立ち位置って、それちょっ

とウザくね」

友人たちの一斉攻撃にあたしは、たじたじとなり、ふてくされてそっぽを向いた。

「ふん、しょせんロマンティズムに欠ける少女たちには、いくら説明したってムダのようね……」

「なーに言ってるのよ、そんなチヨコで固めてシュガーコートしたような甘々のロマンスなんて、バージンと一緒にブティックホテルのサニタリーボックスへ捨ててしまったわ」

「うわ、なんて下品な……」

そのとき、あたしたちのやり取りをちよつと離れたところから傍観していたチャコちゃんが、少し戸惑った様子で言った。

「でも、そのヨウスケってひと……あたしの知ってる卯月先輩とは、ぜんぜん雰囲気違うみたい」

「そうなの？」

ワンピースの襟に垂らした黒髪を揺らし、彼女はこくりとうなずいた。

「あの人は何度も顔合わせてるし、いっぱいお話もしたけど、そんな乱暴な言葉使うひとじゃなかったよ。すぐくおしとやかだし、それに見ず知らずのひとのバイクにいきなり跨がったりなんて絶対しないと思う」

「うむむ……じゃあヨウスケと卯月先輩とは、他人のそら似？ まさかね、だってあんなにルックス目立つやつ、あたしたちの周りにそうはいないよ」

「あのさ」

不意に沙織が言った。

「その卯月先輩ってひと、じつはヨウスケのお姉さん、ってことない？」

「ないない。あいつのお姉さんは美人のOLで……」

あれ、ちよつと待てよ。

考えてみたら、あたしヨウスケのお姉さんのこと、なにも知らない

いや。美人のOLってゆーのも、じつは勝手にそう思い込んでるだけで根拠があるわけじゃないし。だとすれば……そうか、なるほど、そういう可能性だってあるわよね。姉妹といえどあそこまで似るのか？　みたいな疑問はひとまず置いて、そういうことなら、すべての疑問に説明がつけられる。

今朝見かけたヨウスケに酷似した生徒は、昨日出会ったヨウスケとは別人ではあるが、他人ではない。キャラは違うが、外見はそっくり。なんたって、血のつながった姉と妹なんだもん。

頭のなかで、かなり低次元なジグソーパズルの欠けていたピースが、ようやく見つかった。

「さすが沙織、あんたって頭いいね、だてに哲学書とか読みあさってないよ」

「ふん、今さらなに感心してんのよ。　同じものと等しいものは互いに等しい。これユークリッド原論がしめす公理、ドゥーユーア・ンダスタン？」

「なにそれ、ぜんぜん意味分かんね。つか微妙に使い方間違ってる気がするし」

「ふん、アダマールの三円定理も知らないくせに」

「そんなの授業で習ってないし」

ふくれっ面のあたしに、美樹が言った。

「いっそ、卯月先輩ってひとに会ってみたらどうよ？　あたしたちも付き合っし」

「え……」

「ここで、うだうだ言っても始まんないじゃん。一緒についてっ
てあげるからさ」

「まじ？」

「まじ」

顔を上げてみんなを見回す。全員真顔でうなずいてくれた。

「ありがと、みんな……」

でも一人残らず目の奥が笑っていた。

「……その提案はさ、純粹に友情から出たものだと思ってるよ、いいのよ」

「友情が五パーセント、残り九十五パーセントは好奇心」

「うわ、友情少なっ」

「でもさ」

前列の席に陣取っていた愛子が、あたしの机に頬杖つきながら言った。

「そのひと、いきなりあたしたちに襲いかかってきたりなんてしないよね」

「なわけないじゃん。おしとやかなひとだってチャコも言ってたでしょ」

「……でも、突然豹変するのよね」

美樹が、ぽんと手を打った。

「そうだ、あたし十字架持ってるよ」

「はあ？」

ワンピースのポケットから、大ぶりのロザリオを取り出して、あたしたちに見せた。

「ほらっ、けっこう雰囲気あるっしょ」

ネックレスとして作られたなんちゃってロザリオとは違い、ちゃんとキリスト像が彫り込まれた本格的なものだった。

「役に立つかなこれ、ぜったい立つよね？」

「立つわけないじゃん。てか、なんでそんなもん持ってるわけ？」

「このあいだホラー映画観てて思ったの。リアルでも不意に吸血鬼とか襲ってきたら怖いじゃん。だからなにか身を守るためのものを、ふだんから用意しておかなきゃって」

「あのさ……」

「カトリックの教会に通う友だちに頼み込んで譲ってもらったんだ。これさえあれば、吸血鬼もたじたじ。まあ言ってみれば、水戸黄門の印籠みたいなものね」

「ばっかでー」

鼻で笑ってやった。つうか、ヨウスケはドラキュラじゃないっての。

なんだか急にばからしくなり、あたしは次の授業の準備に取りかかりながら、みんなに宣言した。

「やっぱ、ヨウスケのことは自分で確かめるよ。放課後ひとりで卯月先輩に会いに行ってみる。結果は、夜にでもメールでみんなに報告するから」

そうきっぱり言うと、沙織たち三人はのろのろと腰を上げ、ワンピースについたシワをのばしながらため息をついた。

「なーんだ、つまんね。つき合って時間そんした」

「せっかく探偵ごっこで暇つぶせると思ったのに」

「自分から話題ふつといて、最後それはないよね」

ぶつくさ文句を言いながら、めいめいの席へと戻ってゆく。

……一瞬でも、友情なんて信じたあたしがバカだった。

帰りしな、美樹があたしのほうを振り返り、手の中で口ザリオを揺らして見せた。

「一応、これ持ってた？」

「いるかつ！」

つづく……。

ゆみ子、宇宙人に連れ去られる

さつきから頭のなかで、映画『ピンク・パンサー』のテーマがくり返し流れている。こんなに緊張してドキドキするのって、沙織たちと高校入試の合格発表を見に行ったとき以来だ……。

あたしは、トラップだらけのダンジョンを探索する勇者一行なみの用心深さで、盛夏の干上がった舗装路をそろそろと踏みしめていた。ローファアの靴底がじやりつと小石を噛むたび、とくんと心臓が高鳴る。こういう緊迫した雰囲気ってちょー苦手。気合いを入れれば入れるほど、あたしは決まってドジを踏む。そのため、いやが上にも動作が慎重になってくる。軽くにぎった手のひらがじつとりと汗ばんで気持ち悪い。ところが、こんなに気を張って歩いているにもかかわらず、その実あたしの足はまるでふわふわと雲の上を進んでいるような、そんな頼りない感覚を伝えてくるのだった……。

前方、約十メートルほどのところを、白いワンピースを着た女の子が歩いている。

ちっちゃくて可愛いベージュ色の革製リュックを肩に引っかけ、まるでパリコレのステージを周回する美人モデルみたいに優雅に足を運んでいる。

卯月先輩。

あたしは、彼女が本当にヨウスケのお姉さんなのかを確かめるべく、放課後の校門わきで待ち伏せを試みた。例の当たって砕けるの精神ってやつ。ところがいざ数人の友だちに囲まれ楽しそうにおしやべりしながら出てくる彼女を見て、どうにも声をかけるだけの勇気がわいてこなかった。もしかすると自分は、とんでもない見当違いをしているのではないか……そんな疑問が胸をよぎったからだ。

人待ちを装って立ちんぼうするあたしの目の前を、彼女は悠然と通り過ぎていった。緊張してちらつと見ることはできなかったけど、やはりヨウスケとは別人のようだ。確かに似てはいるけど、ぜ

んぜん違つひと。人格を形成している根源的な部分があきらかに異なっているように思える。言い換えれば、まったく別の魂を持った存在ってこと。ほんの一瞬横顔をうかがっただけで、すぐにそれが分かった。ヨウスケじゃない。同時に、彼女が持つなにか得体の知れないパワーと言うか、抗いがたい魔力のようなものを感じて鳥肌が立った。

あの人すごく、変。

どう例えたらいいか分かんないけど、むりやり表現するならば、ちょー豪華フルーツてんこ盛りトロピカルドリンクのその中身が、実は違法薬物を混ぜ合わせて作った幻覚剤入りカクテルだった、みたいな……。

チャコちゃんの言った通り、きつとヤバいひとに違いない。

そう確信したにもかかわらず、あたしは彼女のあとを尾行した。いや、体が勝手に引き寄せられ、意思とは関係なく足が動いてしまったと言ったほうが正しいのかもしれない。まさに怖いもの見たさとゆうやつ。校門を出たところで彼女はバス停へ向かう数人の友だちと別れ、自分は通りを西へ向かって歩きはじめた。もしヨウスケの暮らすあのアパートへ帰るつもりなら一応方角としては合っている。まあ、徒歩で帰るにはちよつと遠いけど。

とにかく、それから彼女とあたしの尾行劇は始まった。

しばらくすると途中まで彼女と一緒にだった友人はひとりまたひとりと道を折れてゆき、やがてあたしの目の前には卯月先輩の華奢な後ろ姿だけが残った。つかず離れず……、優雅に歩く彼女の背中を追って慎重に歩を進める。

おしゃれにスタイリングされたショートヘア、舞台女優のようにきりつと伸びた背筋、細い肩、小さなお尻、引き締まった足首……なにひとつとつてみても完璧な後ろ姿。匂い立つような美少女であることに關しては、ヨウスケと比べて少しも遜色がない。ぜったい姉妹に違いない……。高まりつつある確信が胸を締めつけ、次第にじりじりしてくる。いっそ駆け寄ってストレートに訊いてやろうか

な。

あの、ひょつとしてヨウスケのお姉さんですか？

なに言ってるの、違うわよ。ってか、あんただれよ？

いや、あたしは、その……。

意を決しかね、まごまごしていると、彼女は一軒のCDショップへ足を踏み入れた。あたしも一呼吸遅れて自動ドアをくぐる。ここへは沙織たちともよく来る。駅前にある量販店なんかに比べて規模は小さいけれど、いつも最新のヒットチャートばかりを追いかけるあたしたちにとっては、じゅうぶん過ぎるほどの品揃えがある。

しかしそんな流行のヒット曲には目もくれず、卯月先輩は店の一番奥にあるクラシック音楽専門ブースへと入っていった。他の売り場の喧噪をよそに、そこだけ別世界のように優雅な時間が流れている。タクトを振るどっかの国のちょー偉い指揮者のポスター。CDを収納するラックだって重厚な作りの木製のものを使用している。ここは、あたしにとってはまったくのトワイライトゾーン。沙織なんかはたまに覗いてるみたいだけど、あたしは一度だって足を踏み入れたことがない。そんな格調高い売り場で、卯月先輩は探しものをしているふうでもなく、ただぼんやりとCDを手にとって眺めている。あたしは、その様子を少し離れた位置から気づかれないように注意して盗み見る。クラシック音楽なんてぜんぜん興味ないけれど、不審に思われたら困るのでたまには商品を手にとってみる。Chopin夜想曲集。

「ちょ……ぴん？　ってだれよ」

ふと顔を上げると、彼女のほうも何気ない仕草でこっちを見た。

ばっちり目が合った。やばばばい。反射的に顔を背ける。冷や汗が背筋を伝う。あたしが尾行してるのバレちゃったかな？　目を閉じて心のなかでゆっくり数をかぞえる。いっち、にい、さん、しい……もういいかい？　もういいよ。さらに一呼吸おいてから意を決し、恐る恐る彼女のほうを振り向いた。

いなかった。

「あれ」

きよろきよろと店のなかを見回す。彼女の姿は、いつの間にかア
ニソンのコーナーへと移っていた。テレポーテーションできるんか
い。さすがに金魚のフンみたいにびったり後を付いて回るわけにも
いかず、どうしようかと考えあぐねているところへ、カーテンで厳
重に仕切られた薄暗いブースを発見した。ちょうどそこからは彼女
の位置がよく見渡せるし、逆にカーテンに遮られて彼女からはこっ
ちの姿がよく見えない。これぞまさに、ベすとぼいんと。

しめしめ……。

あたしは気づかれないよう、カーテンの奥へそりともぐり込ん
だ。

アダルトビデオのコーナーだった。

月間売れ筋ベストテンのトップワンは、『衝撃！ブルマー女子
高生キャットファイットで大乱闘』だった。

ななな、なによ、ここっ！

びっくりして髪を逆立てた瞬間、そこにいた数人のおっさんが一
斉にこつちを見た。全員目のなかで無数の星がきらきらと輝いてい
る。無理もない、えっちビデオを物色しながら、あーでもない、こ
ーでもない妄想を膨らませているところへ、あたしみたいな可憐
な美少女がいきなり飛び込んできたのだ。しかも、しゃがんだらパ
ンツ見えそうなくらいミニ丈のワンピースを着ている。これはもう、腹
を空かせた野良猫の群に向かってカツオブシを投げ入れるようなも
の。ひえええつ。好色そうな視線を一身に浴び、あたしは大慌てで
そこを飛び出した。

死ねっ、バカっ、えっち、変態っ、女の敵っ！
どん。

勢い良くカーテンをくぐり抜けたはずみに、だれかとぶつかった。
「きゃあ、ごめんなさい」

卯月先輩だった。

「げ……」

どうやらあたしが飛び出してくるのを察知していたらしく、その細い体でしっかりと抱き止めてくれた。

もうバカバカ、あたし先輩のこと一生離さないからっ！

端から見れば、そんなセリフが似合いそうな場面だけれど、でも実際は大違い。ちょー大ピンチの構図なのだ。

「あわわわ」

驚いて彼女の腕から逃れようとしたけど、両手でがっちり肩をつかまれ、しかも真正面から見つめられてしまった。こうなったらもう蛇に睨まれたケロ口。あたしは身動きとれないまま、しだいに彼女の美しい瞳に飲み込まれ、動きを封じられていった。

「あ、あの……」

彼女は、にっこり笑って言った。

いや、歌った。

「探しものはなんですか 見つけにくいものですか カバンの

なかも机のなかも 探したけれど見つからないのに」

「えと……、あのですね」

「まだまだ探す気ですか それより僕と踊りませんか 夢のな

かへ 夢のなかへ 行ってみたいと思いませんか」

うふふ。

彼女が笑った。あたしもつられて引きつった笑みを浮かべた。

えへへ。

そこでようやく彼女は、あたしの肩から手をはなしてくれた。全身の力が抜けて、へろへろとその場に座り込んでしまった。お尻がぺたんと床について冷たいリリウムの感触を味わう。そうしながらもあたしは彼女から視線を逸らすことができず、まるでキリスト像に向かって祈りを捧げる敬虔なクリスチャンみたいに眩しそうにその顔を見上げていた。どうか慈悲を、あーめん。

そんなあたしを尊大に見下ろし、彼女は小首をかしげながら言った。

「私になにかご用かしら？」

「あの……ですね」

「まさか、あなたも私のことを宇宙人だと思っているの？」

「う、うちゅうじん？」

「そうなのね？ だから、ここその後をつけてきたんでしょう」

唐突におかしなことを言われて戸惑ったが、ここはひとつ全力で否定しなければならぬ場面だと確信した。あたしは鼻水が出るほど勢いよく首を左右に振った。ぶるんぶるん。

「ち、違います。そんな宇宙人だなんて」

「あらら、なんだ違いの……」

急に彼女は悲しそうな表情を浮かべた。

あたしは途方にくれた。

つづく……。

ゆみ子、宇宙人に連れ去られる（後書き）

だんだん、ゆみ子のキャラが壊れてゆく……。

魂だけは男の子

「そんなところへ長いあいだ座っていると、病気になってしまいうわよ」

卯月先輩は、床の上にへたり込んでいるあたしにそつと手をさしのべた。恐る恐る、その手につかまる。すべすべした細く長い指からひんやりとした感触があたしの手のひらへ伝わってくる。ネイルカラーは上品な色合いの淡いピンク。ただしどの爪にも、ルビーみたいに赤く燃えるネイルストーンが散りばめてあった。中指には、翡翠を削って造ったような綺麗なリングが嵌められている。少しためらってから軽く握りしめると、彼女はぎゅっと強く握り返してきた。そのままぐいっと腕に力を込め、あたしのことを引っ張り上げる。

「きやつ」

華奢な体に似合わず、けっこうな力持ちだ。あやうくもう一度、彼女の胸のなかへ飛び込んでしまうところだった。

「あ、ありがとうございます……」

「すぐにお尻を消毒したほうがいいわね」

「え、なんで？」

「あら、知らないの？ AV売り場の床には、病原菌がうようよしっているのよ。淋菌、クラミジア、カンジダ菌、ケジラミ……」

「ふええっ！」

慌てて、ワンピースの上からお尻をぱたと払った。気色悪うっ、後で手も消毒しなくちゃ。

「そ、そんなの感染させられたら、もうお嫁に行けなくなっちゃいますうつ」

「バカね、冗談に決まってるでしょ」

「ああ……、冗談だったんですかあ」

あたしがほつと胸をなで下ろすと、こちらの目を覗き込むように

して、彼女が笑った。

「ふふ、あなたって素直な性格してるのね」

「えと……」

褒められたのか、はたまたバカにされているのか……？

「良く言えば天真爛漫、悪く言つと単純明快、ってところかしら」

どうやら、さりげなくバカにしているらしい。

「じゃ、行きましょうか」

彼女はさつと身をひるがえすと、CDショップの出口めざして歩きはじめた。急いで床からカバンを拾い上げ、あたしは小走りでその後を追った。

「あの……行くつてどこへ？」

「デネブ・カイトスよ」

「へ？ でね……ぶー？」

「プレアデス星団にある二等星の名前なの」

うむむ……言ってることがさっぱり分からん。どこまでが冗談で、どこまでが本気なんだか……。

冷房の効いた店内から一步外へ足を踏み出すと、鋭い夏の陽射しとともに再びうだるような暑さが襲いかかってきた。頭のとっぺんがちりちりと焼け、脇の下からどっと汗が吹き出す。どこか先のほうで道路工事でもしているらしく、渋滞して数珠つなぎになった車の列から不快な排気ガスがとめどなく流れ出している。あたしは軽い立ち眩みのようなものを感じながら、目の前の横断歩道を渡った先にドーナツ店があるのを発見し、すぐるような思いで彼女に訊ねてみた。

「あ、あの、そのドーナツ屋さんでなにか冷たいものでも飲みませんか？ もちろん、あたしのおごりです」

すると卯月先輩はわずかに顔を振り向け、嬉しそうに言った。

「あら、あなたにもテレパシーを使う能力があったのね」

「え？ テレパシーですか」

「そうよ。ちょうど私も今、あの店へ強引にあなたを連れ込んで、あれこれ因縁つけては冷たい飲み物でもおごらせようか、なんて考えていたところなの」

「ひえー、なんでも好きなものご馳走しますから、因縁とかつけないでくださあい」

「うーん、どうしようかな……。あなたってちよつと被虐的な可愛らしさがあって、本能的につい虐めたくなっちゃうタイプなのよね」
「可愛らしいという言葉だけありがたく受け取っておきますので、どうかその本能は理性で封じ込めておいてください」

「一応、努力はしてみるわ」

フライングソーサーと書かれたその店の看板には、稚拙な絵でUFOとタコのお化けのような宇宙人らしきものが描かれていた。入り口のガラス戸を押し開けると、甘ったるいドーナツとコーヒーの香りが肺のなかへ流れ込み、たちまち食べ盛りのお腹が化学反応をおこして、ぎゅるつと鳴った。見ると店内はそこそこ混み合っていたが、ちょうど高校生のグループが席を立つところだったので、入れ替わるようにしてそこを陣取った。

「卯月先輩は、なにがいいですか？ あたしちよつと小腹がすいたのでチョコリングとかも食べますけど、先輩も飲みものだけじゃなく好きなものを遠慮せずに仰ってくださいね」

「あら、私の名前を知っているのね？ そういえば、あなたのそのバカっぽい喋りかた……。私どこかで聞いた覚えがあるわ」

「……あの、たぶん昨日の晩に電話でお話したんだと」

彼女は、ぼんと手を打った。

「あなた、昨夜電話してきたヨウスケのお友だちね。なんだ、それならそうと先に言ってくれば良いのに。てつきり私のことを宇宙人だと勘違いした頭のなかがちよつとMIBな後輩のひとりだとはかり思っていたわ」

「ええっ、そんなおかしい妄想に取り憑かれた生徒が、うちのがつこには何人もいるんですか？ ってか卯月先輩、やっぱりヨウスケ

のお姉さんだったんですね。……ああ、良かった」

ほっと安堵の息をついた。その真相を知りたいがために、ここま
で彼女を追ってきたのだ。美人のOLというささやかな妄想は消え
てしまったけど、ヨウスケと瓜二つのお姉さんが同じがつこの先輩
だったという事実をあらためて確認し、すつと心の晴れる思いがし
た。さつそく今晚、みんなにメールで知らせてやろう。上機嫌で微
笑んでいると、彼女はホステスをからかう中年おやじのような卑俗
な視線をあたしに向けてきた。

「ふーん……なるほどねえ」

「な、なんですか？ そんな、いやらしい目であたしを見ないでく
ださい」

「あなたって顔も可愛いけど、ほんと美しい足してるわね……。す
らつと真つすぐに伸びていて肌もきれいだし、それでいて妙に扇情
的というか肉感的で」

「あはは、……それはどうも」

「知ってた？ ヨウスケって筋金入りの足フェチなのよ」

「さ、さいですかー」

このひとは、いきなりなにを言い出すのやら。そんなちよー個人
的な嗜好なんか知ってもあまり嬉しくない。

「ただあの子って小さいときから噛みぐせがあってね、ぷにぷにし
た白い肌を見ると無意識に歯を立ててしまうらしいの。だから、え
っちするときなんかはじゅうぶん注意してね。下手をするとあなた
の太ももやその可愛いお尻に、キスマークならぬ歯形がいくつも残
ってしまふという淫猥な事態を招きかねないから」

「は、恥ずかしいこと言わないでください！ てか、女の子同士で
えっちなんかしないと思います」

「あら、ヨウスケは男の子よ」

「え……」

さらつと言われてしまった。やはりニューハーフだったのか。あ
んなに可愛いのに。『ポップティーン』誌とかの紙面をにぎわして

いる人気モデルなみの美少女なのに。胸だつて、あたしのよりずつと立派だし……。

そんな鬱屈した心情をあたしの顔から読み取ったのか、彼女が付け加えて言った。

「でも、まあ生物学的に言えばメスということになるのかしら。あはは、メスって言い方はちょっと低俗だったわね。でもまあとにかく安心してちょうだい、体のほうは全くの女性そのものだから」

かえって安心できませんけど。

「じゃあ、じゃあ、あのあの、ようするに、いわゆる……性同一性障害ってやつですか？」

「あら、難しい言葉を知っているのね。まあ、当たらずといえども遠からず、つてところかしら。私はあいにく病理学的な知識は持ち合わせていないから正確なところは分からないけど、あの子の場合、肉体と性自認が一致しないとかそういう問題じゃなく、誤って女の子の体のなかへ男の魂がまぎれ込んでしまったという表現が近いのかしら。うーん、やっぱり分かりづらいいかな、姉である私にはじゅうぶん理解できるんだけど……」

「単純おバカなあたしの脳ミソでは理解不可能みたいです」

「まあいいわ。でもその男としての魂は、すっかりあなたに恋してしまっているらしいのよ。姉である私にはよく分かるわ、あなたのことがとっても好きみたい。もちろん異性としてね……」

好き　とか言っちゃいましたか、本人より先に、お姉様の口から……。まあ、薄々感づいてはいたんだけど、てかあたしもヨウスケのこと好きだし、でも女の子だし。魂うんぬんは別として……。

「さてと……」

卯月先輩はメニューを手にとって眺めた。

「じゃあ遠慮なく、将来の義理の妹にご馳走してもらおうかしらね」
まだ結婚するとか決めてないし。というか戸籍上できないかもしれないし。

「ええと、そうねえ……フレンチクルーラーにココナツレイズド、

ハニーデ IPP、エンゼルクリーム、あとベルリーナーとクラブ
フエンもいいわね、それとマダガスカルバナナに、えとせとら、え
とせとら……と」

「え、えーっ！ そんなにひとりで食べるんですかあ？」

「甘いものは別腹なのよ、いくらでも食べれちゃうの。ましてや他
人のおごりだと、なおさらなのよね」

「あは、あははは……」

ふと、昨日バイキングではしゃぎながら食べまくっていたヨウス
ケの姿が頭のなかをよぎった。さすがは姉妹？？いや姉と弟……。

つつく……。

ガール・ミーツ・ボーイ

日曜日の空も、やはり底抜けに青かった。

まるで薄荷水を詰め込んだボトルの底みたいに清々しいブルー。部屋の窓をあけて見上げると、視界を斜めに突っ切って真っ白いヒコキ雲が三本すーっと東の空へ伸びていた。なんだか絵葉書にでもして残しておきたくなるような、そんな心地のよい朝。

階段を下りて居間のドアをあけると、ママが窓辺にならべたプラントーに水をやっているところだった。ちょうどゼラニウムの鉢植えが満開で、濡れたミカン色の花卉が朝日を浴びてきらきら輝いていた。キッチンから、ブラックペッパーの香ばしい匂いがただよってくる。見ると、パパが堂に入ったフライパンさばきで、サイコロステーキを焼いていた。

洗面台へ行って大きな鏡に自分の顔を映し出してみる。たっぷり一時間かけてメイクアップしたその顔は、なんだかつんと澄まして少しよそよそしく見えた。にっと笑ってみる。鼻の穴がちよっと広がってあまり可愛くなかった。今度は媚をふくんだような目で憂い顔をつくってみた。まるで不良のお姉さんがガンを飛ばしているように見えた。だめだ、こりゃ……。すると鏡に映った間抜けな百面相の後ろから、ママがぬつと顔をのぞかせた。

「あらっ、今日はやけにめかし込んでるじゃない。さては男の子とデートだったりして……」

デートという言葉を目ざとく聞きつけて、パパもフライパン片手にとことこやって来た。

「なになに、ゆみ子おまえ彼氏いるのか？　どんな男だ？　パパよりも良い男か？」

まゆを八の字にして情けない顔をする。

「ちよつとお、おニユーのキャミソールに油とばさないでよ」

「ああ、ごめんごめん」

「この世にパパより良い男なんているわけないじゃん」

と言いつつ、さりげなく手を出す。このあいだパパからもらった一万円は、もう半分くらい使ってしまった。ここはひとつ補正予算を……。しかしその厚かましい手のひらを、ママが容赦なくぴしゃりと打った。

「あ痛てっ」

「そうやって男をたぶらかしてお金をせしめようとしていると、将来ろくな女にならないわよ」

ママのとなりで、その彼女にたぶらかされた本人が相づちを打った。

「うんうん、ママの言う通り……」

「ふんだ」

作戦、失敗。しかたなくあたしは、もう一度鏡を振り返ってリップの輝きぐあいを確認してから、そそくさと居間を出た。

「じゃあ出掛けるから」

「あれっ、朝メシ食わないのか？」

「ごめん、外で食べるの」

「せっかくお前のために、お肉焼いたのに……」

「朝っぱらから、そんな脂っこいもの食べたくないし」

「しかたない、じゃあお前の分はパパが責任もって処分するとしよう」

「ってか、最初から自分が食べたかっただけでしょ」

パパは今年の春メタボ検診で引っかけかり、その後しばらくは料理を作るとき食事バランスガイドを手放さなかった。しかし、だんだん危機感が薄れてきたらしく、最近ではまた飽食ざんまいの日々を送っている。この分だときつと来年の検診でもアウトの判定を受けるに違いない。

「今夜は手巻き寿司にするから、なるべく早く帰ってこいよ」

「うん。でももし遅くなってもウニと甘エビだけは残しておいてね」
「たぶん、真っ先になくなると思うぞ」

「もう、パパの意地悪」

玄関でパンプスに足をねじ込んでいると、後ろからママが心配そうに声を掛けてきた。

「あんまり遅くなっちゃダメよ」

「はい」

「あと調子に乗って変なことしないでよ。お母さん、まだ孫の顔なんて見たくないんだから……」

なにを言うか。

「じゃあ行つてきまーす」

「行つてらっしゃい」

お気に入りのトートバッグを肩に引つ掛け、玄関ドアをあけた。七色に渦を巻く太陽光線をまともに浴びて、くらっと目眩がした。バッグから、つばの広いレディースハットを取り出して頭に乗せる。キヤミと同色のペーパーミントグリーン。左耳の上あたりに、レースを編んだ大ぶりのコサージュが付いている。ふと横を見ると、雨よけカバーをかけたままの愛車ヤマハXVビラーゴが、朝露に濡れながら所在なさげに佇んでいる。そつと燃料タンクを撫でてやった。「今日は、あんたは留守番だよ。また今度、一緒に遊んであげるから」

ヨウスケと約束した時間までには、まだかなりの余裕があった。あたしは両手を広げてうーんと深呼吸すると、駅までの道のりをバス停ひとつ分だけ歩いてゆくことに決めた。

休日の駆つていつもそうなんだけど、一種異様な熱気と、香水や整髪料のにおいと、そして抗いがたいような焦燥感に満ちている。そんなに喜び勇んで一体どこへ遊びに行くんだらう。せつかくの休みなんだから、もつと心に余裕を持って過ごせばいいのに。

待ち合わせ場所に、まだヨウスケの姿はなかった。かつてタバコの自販機と喫煙スペースがあったその場所は、今は白い丸テーブルとイスが並べられ、人待ち顔の若い男女であふれかえっていた。手

持ちぶさたで壁に寄りかかって携帯をいじくり回していると、続げさまに男の人から声を掛けられた。

「あの、ファッション雑誌のモデルになりませんか？」

「なりません」

「うちの店で働きませんか？　ひと月に軽く百万くらいは稼げますよ」

「働きません」

「ビデオに出演してみませんか？　ロケはハワイのワイキキビーチで行います。あ、もちろん水着姿になるだけです」

「出演しません」

だんだんイライラして腹が立ってきた。おかしなスカウトマンから声を掛けられるために、頑張っておめかししたんじゃない。なるべく他人と目を合わせないよう携帯画面に集中していると、視界の端っこに、またひとり男の人があきらかに自分目ざして近づいて来るのが見えた。

まったくもうっ！

あたしの横で立ち止まったその男に、振り向きざま口をひらく間もあたえず言ってやった。

「エロ本も、キャバクラも、エッチビデオも、みーんなお断りしますからっ！」

「え？」

「……あれ」

ヨウスケだった。

「なんだか知らねーけど、いきなりわけも分からずに拒絶されちまったよ……」

「あはは……ごめんね、ちょっとしたミスタイクなの」

言いながら、あたしはドギマギしていた。なんだか今日は、この前とは雰囲気違う……。

前回会ったときは明らかに女の子の姿だったけど、今日の前にいるヨウスケは完全に男の子のファッションをしていた。白い開襟シ

ヤツの上に、ダークグレーの二つボタンジャケットをはおり、ウエスタン調のカーゴパンツをロールアップしてはいている。カラーレザーを二重にしたチョーカーが、なんともワイルドな感じ。胸の膨らみがほとんど分らないのは、コルセットかなにかで締め上げているのかな……。あの精悍で美しい顔も今日は一段と引き締まって見え、なんだか飛びつきりの美少年って感じた。

「なーに見とれてんだよ、おめーは」

「いや、あの……マジで格好いいなって思って、うん、あたしちょっと惚れちゃいそう」

「おめーも、びっくりするくらい可愛いぜ。まあ、俺のためにお洒落してきたってわけじゃねえんだろうけどよ」

「またそんな……、相変わらず口が悪いのね」

「ひよっとしてお姫様は、腹が減って気が立っているのかな？ よし、取りあえずなんか食いに行こうぜ」

言うが早いか、あたしの指に強引に自分の指をからめてきた。えーっ、手をつないで歩くなんてちょー恥ずかしいよ、小学生のカツプルじゃあるまいし。でもヨウスケのジャケットにあたしの肩が触れた瞬間、なんか胸がきゅんとなった。ほんと男の子だったら良かったのに……。あたしは、そこからスターバックスでいつもの席につくまでのあいだじゅう、なんだか地に足がつかずふわふわ夢のなかを歩いているような感覚を味わった。いや、イスに腰掛けて目の前にフラペチーノとチョコレートマフィンが並べられてからも、ほーっとヨウスケに見とれていた。

ほんと男の子だったら良かったのに……。

「おめーこの前、千里ネエに会ったんだって？ 同じ学校に通ってたんだってな」

「え、あ、うんそうなの。ぐうぜん校門の前で見かけてびっくりしちゃった」

ヨウスケが、ぐっと身を乗り出してくる。

「でよう……、千里ネエは、俺のことなんか言ってたか？」

「べつに」

「隠すなよ」

「隠してなんかないもん」

「また、おっぱい揉んじゃうぞ」

「揉まれたら、揉み返す」

「ははは、今日は俺様のおっぱいは完璧にコーティングしてあるから、揉むのは無理だ」

「コーティングって……」。

「なあ、教えるよう」

そう言っただけをずらし、あたしにぴったり身を寄せてくる。思わず肩がびくと震えた。その肩にぐいっと腕を回し、あたしの顔を覗き込んできた。まさかこんな場所で、本当にあたしの乳を揉むつもりじゃないだろうな。それでなくともあたしたち、ただでさえ目立っているというのに。

「分かったわよ、言うから。正直に話すから恥ずかしい行為におよぶのだけは止めて」

「おーし、それじゃあきれいさっぱり自供しまえ」

仕方がないので、あたしはぼそそとつぶやくように言った。

「……足フェチ」

「はあ？」

「ヨウスケは、筋金入りの足フェチなんだって」

がくつとヨウスケがずっこけるのが見えた。

「あと噛み癖があるから、えっちなときは気をつけるって」

「お、おまえまさか……、それを信じたわけじゃねーだろうな」

「うん、極めて重要な情報として頭のなかにインプットした」

「インプットするなよ!」

「あとね……」

「ええっ、まだあるのかよ??。くそっ、あのお喋り女めえ」

狼狽するヨウスケの耳元に唇を寄せて、囁き声で言った。

「……ヨウスケの魂は、もうどうしようもないくらい、あたしに惚

れちゃってるんだって」

言ってから、ちよつと恥ずかしくなった。言われたヨウスケはもつと恥ずかしいに違いない。しかし慌てふためくかと思いきや、ヨウスケはあたしの肩に回した腕にぐつと力をこめ、胸元へ抱き寄せた。そして、あつと思つた瞬間には、あたしの頬にキスしていた。

「それ、事実だから??」

あたしの脳内回路がフリーズした。再起動するまでには、少し時間がかかりそう。

……ほんと、男の子だったら良かったのに。

つづく……。

メタモルフォーゼ

ああ、そうか、美少女つてのは男装するとそのまま美少年になってしまうんだ……。

ヨウスケの涼しげな瞳に見つめられ、至極当たり前のことに改めて気づかされた、あたし。

なんか頭の中が、ぼわんとしちゃってる。

アイルランドの哲学者、ジョージ・バークリーは言った。

と、あたしのクラスメイト、沙織は言った。

存在することは知覚されることである、と……。

今やあたしの五感のすべては、この上もなくヨウスケを感じている。

ヨウスケの眩しさ、ヨウスケの匂い、ヨウスケの息づかい、ヨウスケの温もり……いや味覚だけはまだ試してないけど。

でも、とにかくヨウスケは確かにここにいる。

あたしのすぐ目の前に存在している。

そう、手を伸ばせばすぐに頬つぺたをむにゅって出来そうなくらいの距離に。

むにゅ。

「痛へへへっ」

いきなりキスしてきやがったお返しだ。あたしはヨウスケの両の頬を思いっきり指でつまんで引っぱってやった。

「ほまえってやふは、ふおんと、なにひゆるんらおー」

涙目になってあたしの攻撃から逃れようとするヨウスケ。でもまだ許してやらない。うーむ、横に広げてみてもやはり美少年は美少年のままか……。しからは今度は縦につ。むにゅーっ。

「ひーかへんに、ひやめれっ！」

やっこの思いであたしの手を振り払い歯医者さんにさえ見せたことのないような無防備で面白い顔から解放されたヨウスケは、その

ままたがたとイスをずらしテーブルを隔ててあたしの真向かいに移動した。うん、これでようやく元の位置に戻った。

「自慢じゃねーけど、俺様のファニーフェイスは小顔なこと通ってんだよっ。それを広げてどうすんだ、広げて！」

「なによ、口を広げておせんべい食べやすくしてあげたんじゃない」

「おめー、そーゆー生意気な口ばっかきいてっ……」

両手を目の前にかざして、にぎにぎとイヤらしい動きをして見せる。

「また、おっぱい揉んじゃうぞ」

そう言っ、にやり、攻撃的な笑みを浮かべた。でも頬っぺたが赤く腫れているので、ぜんぜん迫力がない。あたしはテーブルに頬づえをつけて斜め約十五度の視線で見上げながら、ふっとニヒルな笑みを浮かべてやった。

「まっこと、子どもよのう……」

「あ、なんだよー、そのひとを蔑むような視線はよ。さっきはあんなに良い雰囲気だったのに、なんかもう台無しじゃねえか」

「ふふ、女心を解せぬとは、そちもまこと哀れなやつよのう……」

ほ……と、わざとらしくため息をつく。それを見てヨウスケは、はつとなにかを悟ったような顔をした。

「もしかして……これがあの、世に名高いツンデレとゆーやつか……」

こらこら、ツンデレをそんな幻の逸品みたいに言うな。しかしヨウスケは感慨深げに何度もうなずきながら、ツンデレという言葉をくり返し口のなかで噛みしめた。

「そうかあ……、これがツンデレかあ……。嫌よ嫌よも好きのうちという、あのツンデレなのかあ……」

「いや、ちょっと違うかも」

「よいではないか、よいではないか、と帯を引っぱられて、あーれー、とくるくる回る、あのツンデレなのかあ……」

「それ絶対、違うと思う」

「今つ、巫女さんやロボっ娘とならんで、俺様の萌え属性にツンデレが加味されたのだった！」

「ももとの萌え要素がマニアックすぎだろ。なんでツンデレが後から加わんのよ」

「いやまあ、とにかくよ……」

ヨウスケが、可愛らしく頬をぷうつと膨らませる。こういう仕草は、やはり女の子のものだ。

「俺、マジでおめーのこと好きだから」

こうはつきりくつきり言われちゃうと身も蓋もないというか、もう突っ込みのしようがない。

「えーと……」

「言つとくけど、足フェチとか関係ねーからなっ」

「わかってるわよ、あたしだってそんなこと本気で信じてるわけじゃないもん」

「いや、俺が足フェチで噛みぐせあるってゆーのは事実なんだけど、でもそのことと俺がおまえを好きだってことに因果関係はねーってこと」

「ああ、なるほどね……」

「って、本当に足フェチで噛みぐせあるのかい！ 危ないやつだなあ、レクター博士がおまえは……」。

「安心しろ、噛むといつても甘噛みだ。まちがってもおめーの可愛いお尻に血が滲むほど歯形を付けたりなんかしねーから」

「付けられてたまるかつ！ てか、すでにあたしとえっちすること前提に話してるじゃん」

「まあ、そうカリカリしなさんなつて。ほら、チョコレートマフィン食べよ、今日は俺のおごりなんだから」

「食わいでかつ！」

と変な日本語を得意げに使いながら、あたしは本日三個目のチョコレートマフィンにかぶりついた。なんだか知らないけど、今日はやけにメラメラと食欲がわいてくる。ふつうメラメラとくれば闘志

なんだけど、時としてあたしの場合は食欲がわいてくるのだ。

「おめーって、ほんとチョコ好きだよなあ、おめーとキスしたらきつと……」

「試してみる？」

「え、……いいの？」

「絶対だめ」

思いつきり、あっかんべーしてやった。

駅前にある噴水の真っ白い水しぶきに、小さく虹がかかっている。照りつける日差しが、肌を刺すほどに眩しい。

横断歩道に絶え間なく流れる、通りゃんせのメロディ。

信号が変わるたび吐き出される人、人、人……。

雑踏、

人いきれ、

なんの変哲もない、夏の入り口のとある日曜の朝、気怠くて、ひたすらに暑い……。

あたしは空を見上げて、うーんと伸びをした。気持ちのよい青空がどこまでも続いている。

そのとき。

突如、あたしの耳に、ぱしんっ！ という明らかに人の頬を張るような痛々しい音が飛び込んできた。なんだろう、痴話ゲンカか？

しかし間をおかずして子どもが火の付いたように泣きはじめる。

見ると、髪の毛を茶色く染めた若い男が、おそらくは自分の息子であるう三、四歳くらいの子を激しく折檻しているところだった。「ぎゃーぎゃー泣くんじゃねえ、このくそガキがつ、てめーはいちいち痛い目に遭わねーと親の言うことも聞けねえのか！」

いい歳した大人が、まだ年端も行かない子どもに向かって、まるで喧嘩の相手にでも対するように大声で喚いている。

ひどいなあ、いくら自分の子ともだからって、あんな風に怒鳴りつけなくてもいいのに……。叱るなら、ちゃんと子どもにも分かるように、一体なにがいけなかったのか、どこがどう悪くて叱られて

いるのかを理路整然と言つて聞かせなきや。ただイラついた感情のまま、あんな風に怒りだけをぶつけていたんじゃ、子どもだって怖くて泣くばかりだし、どうして自分が叱られているのかさえも考える余裕がないだろうに……。

見ると同じテーブル席には、派手な格好をした若い母親らしき女も座っていた。子どもは、父親の剣幕に恐れをなし、必死になつてその母親に救いをもとめている。しかし彼女はまったく知らんぷりを決め込み、涼しい顔で食事を続けていた。

今どきの若い親つて、みんなああなのかなあ。なんか胸が痛むよなあ……。

ぱしん、また父親が平手で子どもの頬を張った。小さな体がぐらりと揺らぐ。ひどい……。あたしは思わず目をつぶってしまった。いくら親だからって、あんな小さな子どもを何度も打つなんてあまりにもひどすぎる……。

と、急にヨウスケがすつと立ち上がる気配を感じ、あたしは驚いてその顔を見上げた。

「……ヨウスケ？」

瞬間、息を飲んだ。そして自分の目を疑った。

え、この人だれだろう……？　ヨウスケに似てるけど、でもヨウスケじゃない。断じて違う。あたしの知っているヨウスケは、もっと可愛くて、眩しくて、自由気ままで、かつこ良くて、たまには拗ねたりもするけどでも目の奥のほうはいつも笑つてて、あたしはそんなヨウスケのことが大好きで……。

でも、今日の前にいるヨウスケは、これまで見たこともない全く別のヨウスケだった。それは、初めて見るヨウスケの表情。人間つてこんなに怖い顔が出来るんだ……。

とくに目つきが恐ろしかった。

暗い暗い海の底に棲む深海魚の、その何千年も昔に視力を失ってしまった目玉のような、そんな一切の輝きを失った目。でも、ちゃんと淀んだその目の奥底には、怒りとも悲しみともつかないどす黒

い感情が、まるで猛毒を煮詰めて凝縮したようなとんでもない濃度の悪意となつて満ちていた。

怖い……。

ヨウスケが怖い……。

ヨウスケの抱えているであろう秘密が怖い……。

ヨウスケの心のなかに巣食っているかもしれない闇が怖い……。

そして、そんなヨウスケのことがすでに忘れられない存在となつてしまっている、あたしの運命が怖い……。

「ど、どうしたのよ、トイレ……？」

言つた声が震えた。どうしてもふつうに声が出せなかった。あたしが今、ヨウスケに対してこの上もなく恐怖を感じていることが伝わってしまったのだろうか。

ねえ、お願い、もとに戻つて。さっきまでの、かつこ良くて変な冗談ばかり言うヨウスケに戻つてよ……。

しかし、そんなあたしの心の声はとどかず、やがて彼は子どもが泣いているほうへ向かつて歩きはじめた。まるで見えない糸に手繰り寄せられるように……。

夏の初めの日曜日、弛緩した喧噪にみちるその風景のなかにあつて、ヨウスケの存在する空間だけが、その部分だけが凍り付いたように暗く、重く、冷たく歪んで見えた。

つつく……。

ぺいん(前書き)

もう初雪がちらついているというのに、夏という設定で書かねばならない。(涙) まあ遅筆なボクが悪いんだけど……。ふんだ。

ぺいん

駅に隣接するデパートの屋上で、夏の上昇気流に弄ばれながらアドバルーンがゆらゆらと揺れている。

十時を過ぎたあたりから、また気温が上がり始めたみたい。

あたしはヨウスケの背中を小走りで追った。この子なにをする気だろう？　なんだか怖くて声を掛けられなかった。でも放つてはおけない。ヨウスケの態度がおかしくなったのは、おそらくあの若い父親のせいだ。幼い息子の頬を何度も張った男。今も大きな声でなにか喚いている。近づくと、その男の顔が少し赤いようにも見えた。酔っているのかな……。

「いつまでも、ピーピー、ピーピー泣いてんじゃねえ、ひとが見てんだろうがっ」

父親がどなる。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

子どもは、両手で目をこすりながら小さな肩を震わせて泣きじゃくった。

気がつくと、多くの視線がその若い父親のほうへと集まっていた。ある者は冷ややかに嘲笑し、またある者は鬱陶しそうに眉をひそめている。でも誰ひとり、面と向かって意見する者はいなかった。しよせんは、よその家庭の問題　赤の他人が口をさしはさむ筋合いじゃないと思っているのだ。

「まったく、お前えみたいなどんくさいガキは、うちには要らねえな。いつそこに捨てていくから、だれかに拾ってもらえよ」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

蚊の鳴くような声で、男の子が何度もあやまる。いっぽう母親のほうは、まったく我関せずといった感じで携帯電話でだれかと談笑していたが、ふと周囲の視線に気づき不機嫌な顔で電話機をとじた。「ちよっとお、恥ずかしいからやめてくんない？　人が見てるじゃ

ん。そういうことは家に帰ってからやりなよ、まったく親子揃ってバカなんだから……」

「ほつれみる、お前のせいで俺まで怒られちゃったじゃねえか。いいか、家に帰ったら覚えておけよ」

薄笑いを浮かべて、父親が恫喝する。子どもはまたベソをかき始めた。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

「だから、ピーピー泣くなっつってんだろが！」

赤らんだ顔を歪めて、その男はふたたび平手を振り上げた。子どもが縮こまって、ぎゅっと目をつむる。あたしは思わず息を飲んだ。周りで見ていた大人たちのあいだにも緊張が走る。

「このガキっ」

そのとき、節くれ立った父親の腕にほっそりとした指がきつく巻きついた。ヨウスケだった。子どもを折檻しようとして父親が振り上げた腕を、ヨウスケが背後から掴んだのだ。腕を掴まれた父親は、慣性の法則で上体だけをかくんと動かししてから、驚いて後ろを振り返った。

「なんだ、あんたは？」

ヨウスケは答えない。

「このやろっ、その手を離せよ」

父親は、ヨウスケの手を振り払おうと懸命にもがいた。悪趣味なタトゥーの入った太い腕をめちゃくちゃに振り回す。しかし華奢でか細いはずのヨウスケの指は、その男の手首に食い込んだままなかなか離れなかった。それどころか徐々に彼の腕をねじ上げてゆく。「痛てててっ、おいこらやめねえか」

語尾は悲鳴になった。しかしそれを見ていた母親のほうが一瞬ヒステリックにわめきだした。

「ちよっと何すんのさ、あんたいい加減にしないとひとを呼ぶよ。うちは子どもの躰には厳しいんだよ。他人の家庭の問題に、かつこっつつけて横からしゃしゃり出てくるんじゃないよ、ちよーうざい、

胸くそ悪いんだよ」

まくしたてる母親に向かって、ヨウスケが初めて口を開いた。しかしあの爽快だったハスキーボイスは驚くほどに弱々しくて、しかも涙声だった。

そう、ヨウスケは泣いていたのだ。

「……母さん、ぼく、あのおじさんのこと嫌いだよ。どうしておじさんは、ぼくのことぶつの？　ぼく、なんにも悪いことしてないのに。いつも良い子にしているのに。おじさんは、どうしてぼくのこと蹴飛ばすの？　ぼくが女の子みたいだから？　それとも……ぼくがおじさんのこと、お父さんって呼ばないから？」

ぼそぼそと涙声で語るヨウスケに驚いて、その母親はあんどりと口を空けた。

「あんた……なに言ってるの？」

野次馬たちも呆気にとられている。ヨウスケは、父親の腕をひねり上げたまま、ひつくひつくと泣きじやくっていた。

「……ぼく毎日、母さんのことお手伝いしてるよ、宿題もちゃんとやってるし、この前だって算数のテストで百点取ったんだよ。なのにおじさんは、どうしてぼくに酷いことばかりするの？」

「ちょ、ちよつとヨウスケ」

ヨウスケは、あきらかに精神に変調をきたしていた。目を見開いたまま、涙をぼたぼたとこぼしている。あたしは、恐る恐るその肩を揺すってみた。

「ねえ、ヨウスケってば、一体どうしちゃったのよ？」

反応はなかった。まるで人形みたいに、ただあたしに揺すられるがままになっている。母親に向けられた目もなんだか虚ろで、焦点は合っていないように見えた。

「……もうすぐ学校のプール開きだよ。でもぼく恥ずかしくてみんなの前で服を脱げないよ。お願いだから、もうベルトをムチの代わりに使うのはやめさせて、ぼくの体にたばこの火を押しつけるのはやめさせてよ。痛いのはやだよ、熱いのもやだよ。お願いだから、

お願いだから」

ヨウスケに腕をねじ上げられたままの父親が、顔を歪めながら悪態をついた。

「おい、ねえちゃん。お前の彼氏は頭が狂ってるんじゃないのか？」
うるさい、バカつ、元はと言えば、ぜーんぶあんたのせいなんだから。

「ちょっとお客さん、なにやってるんですか？」

騒ぎを聞きつけて男性店員が二人、こちらに向かって駆け寄ってきた。それを見た母親が、ここぞとばかりにまくし立てる。

「こいつなんとかしてください！ いきなりやって来てひとに暴力を振るうんですよ」

あたしは、あわてて弁解した。

「あ、あの、違うんです。ヨウスケは、小さな子どもがひどい折檻を受けているのを黙って見ていらなくて……」

「なにが折檻よ！ 粗相をした子どもをちょっと叱っていただけじゃない」

「でも、あんな小さな子どもを何度も引っぱたくなんて」

店員が割って入った。

「まあまあ、ちょっと落ち着いてください」

そのとき、ヨウスケが急にあたしに言った。

「おい、ゆみ子っ、その子のシャツの袖まっくってみろよ」

「えっ？」

ヨウスケはいつの間にか泣き止んでいて、目をまっ赤に腫らしながら、すごく怖い顔をしていた。

「早くやれってば！」

「は、はい」

すごい剣幕だった。なによ、いきなり亭主関白？ でもなんだか怖くて逆らえなかった。あたしは、ためらいながらも泣いている子どもに近づいた。

「ねえボク、ちょっとごめんね」

小さな腕をそつと掴む。子どもは一瞬びくつと肩を震わせたが、あたしが優しく笑いかけると、されるがままになっていた。それにしても、このくそ暑いのにロングスリーブのシャツだなんて……。

「あつ！」

コットンシャツの袖をまくり上げた瞬間、あたしは小さく叫んでしまった。周りで見ていた他の客たちのあいだから悲鳴が上がる。その子の細い腕には、びつしりと火傷のあとがあつたのだ。明らかに、たばこの火を押しつけたあとだった。二人の店員が、信じられないといったふうに着い母親のほうを見た。

「あ、あんた……」

母親は蒼白な顔で立ち上がると、子どもの手を引いて出口のほうへ歩きだした。

「なによこの店、ちょーむかつく。もう二度と来ないからっ！」

母親に連れてゆかれる瞬間、子どもの小さな手があたしのスカートの端を掴んだ。

「あ……」

白くて短い指は、しかしスカートの布地をすりぬけて、そのまま遠ざかっていった。あたしはなんだか胸が締め付けられる思いで、その儚げな後姿を見送った。

そう言えばいつだったか、看護師志望の愛子がこんなことを言っていた。

生まれたばかりの赤ちゃんは、まだ自分と母親との区別がつかず二者は統一体だと思っている。つまり母親のことを自分の体の一部だと思っているのだ。だから自分のそばから母親がいなくなると不安になって泣きだす。近くにいるときは、手で触れたり口で吸ったりしてその存在を確かめ安心する。そうしながら成長してゆくにつれて、自分が母親とは別の独立した存在であることを徐々に認識し、やがて自我を形成してゆくのだ。

でもネグレクトのような育児放棄によってごく幼いうちに母親から遠ざけられてしまった赤ちゃんは、その安心が得られず成長して

からも自我の確立が不完全なままのことが多い。いつまでたってもオムツが取れなかったり、指をしゃぶるクセが抜けなかったり、又イグルミを抱いていないと不安で眠れなかったりするの、その兆候なのだという。

幼いころに重大な愛情剥奪の経験をしてしまった子どもは、つねに不安でたまらない……虐待を受けている子どもたちは、いつだって愛情に飢えているのだ。

さっき、あたしのスカートの裾を掴もうとした小さな手……。あの手は、本当はなにを掴みたかったのだろう。

気がつくと、父親のほうもヨウスケから逃れ、母親のあとを追って店を出ていた。すでに店員も去った後で、野次馬たちも興味を失ってもうこちらには目を向けていなかった。ただヨウスケだけが、魂が抜けたみたいになって突っ立っていた。

「あたしたちも、ここを出ましよう」

あたしは、ヨウスケの手を引いて店を出た。けっきょく今日もヨウスケにおごってもらうことは出来なかった。でもそんなことは、もうどうだっていい。あたしはヨウスケのことが心配だった。この子はきつと、心にももの凄く深い傷を負っている。なにも喋らずつむいたままのヨウスケとならんで駅前通りを少し歩いた。しばらく行くと小さな公園があったので、そのベンチに二人して腰を下ろした。そのとたん、ヨウスケが急にあたしの腰に抱きついてきた。

「きやあつ！」

こんなところで白昼堂々と押し倒してくる気かあ？ 頭を小突いてやろうと振り上げた手を、あたしは止めた。ヨウスケは泣いていた。あたしのスカートに顔を埋めたまま、肩を震わせ、まるで小さな子どもみたいに……。

あたしは、そんなヨウスケをそっと抱きしめ優しく頭をなでてやった。

「……いいよ、ずっとこのまま泣いててもいいよ、あたしはずっとここにいますから、ヨウスケのそばにいますから」

ヨウスケはなにも答えず、あたしのおニューのミニスカートを涙と鼻水とよだれでびちょびちょにしながら、ただ泣きじゃくっていた……。

つつく……。

恋心つらはら（前書き）

m ふっかーっ！ 連載を再開させていただきます m（――）

恋心うらはら

女心と、なんとやら……。

あたしのスカートに顔を埋めて泣きじやくっていたヨウスケは、
ほどなくしてまるで何こともなかったかのように完璧に立ち直った。
なんなのよ、この回復の早さは？　しかも顔を上げる瞬間、あたし
のおニューのスカートで、ちーんと鼻をかみやがった。

「こ、こ、こ、このおバカーっ！」

ばかりと頭を叩いてやった。

「痛てっ」

駅から三町ほど離れたところにあるその公園は、十八階建ての分
譲マンションとコミュニティセンターの立体駐車場とにはさまれた、
わずかなすき間にあった。遊具はブランコと鉄棒があるだけの小さ
な公園。でも、そびえ立つ建物や植樹されたプラタナスの枝葉に陽
が遮られて、とても涼しかった。

あたしはヨウスケの顔を覗き込んだ。

髪型……ちよつと乱れてるけど、さらさらしてて綺麗。

瞳……まだ少し赤いけど、きらきら澄んでいて素敵。

チーク……心なしかふくれっ面だけど、つるふわで可愛い。

リップ……泣いていたせいかつやつや光ってて、美味しそう。

うん、いつものエロかつこいいヨウスケの顔だ。

安心してうんうんうなずいていると、その一瞬のスキについてヨ
ウスケがあたしの唇をうばった。ただしほんの一瞬、一秒の十分の
一くらいのあいだ唇どうしが、ちゅって触れ合っただけ。でも、あ
たしはまっ赤になって怒った。

「てめーこらヨウスケ、今日はやりたい放題かよ？」

するとヨウスケは情けない顔になって「そんなに怒るなよー」と
言った。

「……なんか、またおめーに色々と迷惑かけちまったようだな」

「うつん、そんなことない」

あたしは、ゆっくりとかぶりを振った。自分はヨウスケの全てを知りたい。可愛らしさや格好良さだけじゃなくて、心に抱えている悩みや過去に負わされた傷、そんな闇の部分からみーんな含めてヨウスケという人間の全てが知りたい。大勢のひとが見ている前であんなにも無邪気に泣いたヨウスケ。その十数年歩んできた人生の裏側には、いったいどんなストーリーが隠されているのだろう……。

「今日は、ヨウスケのセンチティブな精神世界の一端をのぞき見ることができて、すごく新鮮な驚きを味わえたよ」

「ふっふっふ、なに言ってるやがる。あれしきのことと俺様のキャラを知ったつもりになるなんて十年早いぜ。自分で言うのもなんだが、俺って人間は全くつかみ所がねえ」

「ほんとと、自分で言うことじゃないわね」

スカートについた鼻水やよだれをハンカチで拭き取りながら、ふうとため息をついてみる。今日は色々あったけど、ヨウスケのことがますます分からなくなって、そしてますます好きになった。こんな変なやつに心惹かれてしまって、あたしの人生この先いつたいうなってしまうんだろう。ってゆーか、そもそもこいつ女の子だし……。

不意にあたしの耳に、ぽんっという小気味よい音が飛び込んできた。見ると、公園のすみで小さな男の子が父親とキャッチボールを始めていた。まだ買ってもらったばかりのグローブは小さな手にはぶかぶかで、日を浴びてきれいなオレンジ色に輝いて見えた。父親が腰を屈め、キャッチャーの真似をしてミットをかまえる。そのミットに向かって、男の子が大げさなフォームで右手を振りかぶる。二人のあいだを、芝生すれすれの高さでつがいのもんシロチョウがひらひら横切ってゆく。男の子がボールを投げた。今度は大暴投だった。しかし父親はぴょんとジャンプして、頭のはるか上に飛んできたボールを難なくキャッチした。それを見た男の子は、手を打って大はしゃぎをしている……。

ヨウスケがぽつりと呟いた。

「父親っていうのはよう、きつと子どもがまず最初に憧れるべき存在なんだろうな」

「え？」

ヨウスケの横顔を見た。ベンチの背もたれに体をあずけ、青一色で塗られた夏空をぼんやり見上げるその目は、しかしどこか遠い別の世界の景色を眺めているように感じられた。

「ガキのころにさ……、親父に肩車してもらったのがすごく好きで、いつも出掛けるたびに、かたぐるまー、かたぐるまー、ってせがんでたんだ。親父の肩の上から見下ろす眺めって最高なんだぜ。子どもの視線より何倍も高い位置にあるから、ふだん見慣れてるはずの景色がぜんぜん別の世界に見えてさ。なんだか急に自分がエラくなつたような気になって、それがもう嬉しくて嬉しくて……」

「うんうん。分かるなあ、その気持ち」

「俺が小学校へ上がる前に死んじゃったから顔とかはよく覚えてないんだけど、その肩に乗せてもらった記憶だけは今でもはっきり残ってるんだ」

そうか、ヨウスケには父親がいなかったんだ……。

あたしは、もう一度キャッチボールをしている親子のほうへ視線を戻した。子どもの嬌声と父親の笑顔。日を浴びて輝く真新しいグロープ。風のない夏空を行き交う白いボール。ひらひら舞うモンシロチヨウ。降りそそぐ蝉の声。

絵に描いたように平和で幸福そうな親子のすがたを見ていて、あたしはふと、あのカフェで泣いていた男の子のことを思い出してしまった。

「……さっきの子。家へ帰ってからと同じように親に叱られているのかな」

言ってから「しまった」と思った。もう触れないでおこうと思っていた話題なのに、目の前の幸せそうな親子を見ていたら自然と口をついて出てしまったのだ。恐る恐るヨウスケの横顔をうかがう。

先ほどの変貌ぶりを思い出して、ドキドキした。でも、ヨウスケはもう泣いたり怒ったりはしなかった。ただ少し寂しそうにうつむいて、「さあ、どうかな……」とつぶやいただけだった。

そのとき、不意にあたしの携帯電話が鳴った。

「あ、ゆみ子ー。今日の約束、忘れないでよ。あたしたち、先に店に入って待つてるからさ」

沙織からの確認の電話だった。今日のお昼に、あたしは沙織の彼氏であるケンジの紹介で、ある男の子と会う約束をしている。有名な進学校でサッカー部のキャプテンをやっているイケメン男子という触れ込みだったので、昨夜はもう浮かれっぱなしでよく眠れなかった。今朝、家を出たときだって恋のボルテージはもうマックス状態だった。でも今はヨウスケのことが心配で、すっかり気持ちが萎れてしまっている。

「う、うん……」

「あれれ？ ゆみ子ってば、なんだかテンション低いよ、どうしたの？ ひよっとしてアレ始まっちゃった、とか？」

「ば、ばか、そんなじゃないわよ」

「きやはは、冗談だって。とにかくセツティングはバッチリだから、遅れないで来てよ」

「……うん、分かった」

電話を切ってから、気付かれないようにそっとヨウスケを盗み見る。どうしよう……。今日は、このままずっとヨウスケのそばにいてあげたいな。沙織には悪いけどデートすっぱかしちゃおうかな。ごめん、フライドチキン食べたらとつぜん鳥インフルエンザに感染しちゃって、とかなんとか嘘をついて……。

しかし、そんなあたしの心情を察してか、目の前にいる美少年は、いや本当は美少女なんだけど、こちらに顔も向けないままこう言った。

「行けば？ これからデートなんだろう」

やばい、完全に見透かされてる。ってか、なによ、その投げやり

な言いかたは。

「うん、でも……、体の具合が悪いからって断っちゃおうかなって思ってるの。だってヨウスケのこと、ひとりにしておくの心配だし」「ばーか、無理すんなって。楽しみにしてたんだろ、今日のデートめかし込んだあたしの姿を頭のとっぺんから足の先まで眺め回して、ヨウスケがにやけた笑いを浮かべる。急に恥ずかしくなって、あたしは顔を赤くしながらうろたえた。

「べ、べつに無理なんかしてないもん」

「そうかなあ……。でもこんなに可愛い子に迫られたんじゃ、相手の男、きつとイチコロだろうな。うひひっ」

「もう、ばかつ」

あたしが怒ると、ヨウスケは少し真面目な顔になって言った。

「いや冗談抜きでさ、俺もこの後ちよつと用事があるから、俺たちここで別れようぜ」

のろのろとベンチから立ち上がると、ヨウスケは空を仰いで、うーんと大きく伸びをした。あたしは少し拍子抜けして、がっくり肩を落とした。「うえーん、ゆみ子、行かないでーっ」と泣いてすがりついてくるまではいかににしても、このまま一緒にいたいなんて言ったらきつと喜んでくれるかなって思っていたのに……。

「ほんとにいいの？ あたし行っちゃうよ……」

「おう、行つてらっしゃい！ デートがんばってな」

ばしんっ。ヨウスケが勢いよくあたしの背中を叩いた。おつとつと、反動で、よろめく。このやろっ、今の一撃、なんだか悪意がこもってなかったかあ……。

「じゃ、行くね。今夜にでもまた電話するから」

「のろけ話なら聞きたくないぜ」

「ヨウスケのばかつ！」

あたしは肩をいからせ、ぷりぷり怒りながら駅へと歩き出した。きつとヨウスケは、気を使ってわざと冷たい態度を取っているんだと思う。そんなことは分かってる。心の片隅ではそのことをちゃん

と理解してるんだけど、でも乙女心って複雑、こういう場合どうしたってツンケンしてしまう。ごめんね、ヨウスケ。

通りを渡る押しボタン式の信号機の手前で、もう一度公園のほうを振り返ってみた。でもそこからじゃ、もうヨウスケのきれいなシヨートヘアもまぶしい笑顔も見ることではできなかった……。

つづく……。

おうじさま登場？（前書き）

更新が遅いうえに展開が亀のようにのろくてごめんなさい。でも頑張って連載してゆきますので今年もどうぞよろしくお願いしますっ。

m ((m

おうじさま登場？

沙織たちと待ち合わせをしたカフェは、線路をへだてて駅の裏側にあった。ガード下をくぐって、雑居ビルにはさまれた薄暗い路地を抜けた先のどんづまり。そこに優雅にたたずむ、小綺麗な木造の二階建て。

よくギリシャのクレタ島あたりを背景にして撮ったスナップ写真なんかに、こんな感じのお店が写りこんでいる。お洒落で、しかも風格のあるカフェテリア。象牙色に塗られたしつこい壁に、派手な色彩をつらねたサンシェードが垂れ下がっている。料理はアメリカンフードがメインだけど、すごく美味しいしボリュームだってある。ちなみに、あたしのおすすめメニューは、バジルとアンチョビのピッツァ、それに、はちみつをたつぷりと使ったパンプキンパイ。駅裏の街並ってというのは、もともとくすんで色あせていた。時流に乗ってそれなりに栄えた駅前繁华街にくらべて、取り残され、拗ねてしまった感じのする古くさい営みが根付いていた。飲食店はいわゆる飲み屋ばかり。商店だって「今さらコンビニへなんぞ転身できるかい」みたいな、やや開き直った感のある時代遅れしたお店がほとんどだった。

見捨てられ、風化した街。

薄暗くてじめついた、胡乱な空間。

とてもじゃないけど、花も恥じらう女子高生には似つかわしくない場所だった。

でもここ数年のあいだに、この寂れた街にも少しずつ変化があらわれはじめたみたい。古ぼけた建物のあい間あい間に、若者むけのお洒落なお店がぼつりぼつりと顔を見せはじめたのだ。しかも健全で品行方正な表通りではあまり見かけないような、わりとマニアックな店が多かったりする。

インディーズ専門のCDショップ、個人輸入のアジアン雑貨店、

タトゥーやボディピアスの専門店、ゴスロリファッションのブティック、はてはレイヤー御用達のウィッグ専門店まである。

老いて色あせた街は、いつしか若者たちの物欲と好奇心をそるお洒落でスタイリッシュな空間へと変わりはじめた。しかも、ちょっぴりアンダーグラウンドな香りたさよう、秘密基地めいた遊び場だ。その注目スポットのなかでも特にあたしたちのお気に入りがこのお店、今日沙織たちと待ち合わせしているカフェ・ブラックローズなのだ。ウッドデッキに設けられたテラス席には、色とりどりの鉢植えのバラが甘い芳香を放ちながら、まるでクリスマスケーキのデコレーションみたいに綺麗に並べられている。

ヨウスケと別れたあたしは、表通りの人ごみを早足にすり抜け、ティッシュ配りのおねえさんや街頭アンケートのおにいさんたちを巧みにかわしながら、なんとか約束の時間までに待ち合わせ場所へとたどり着いた。途中、ガード下をゆく自転車のお年寄りとおやうく激突しそうになったことは、このさい秘密にしておく。腕時計を見ると、きっかり一分前、すべり込みセーフってところ。

少し重たいかしの木の扉を両手でぐいっと押し開けると、頭のうえで、ガラゴロンと景気よくカウベルが鳴った。同時に、チェダーチーズやらデミグラスソースなどの美味しそうな匂いが一斉にただよってきて、あたしのお腹が、さっき食べたばかりのチョコレートマフィンをえいっとどこかへ押しやった。いつでも好きなだけ食べられますぜえ、旦那。って感じ。

日曜のお昼どきとあって、さすがに店内は混み合っていた。でもそこは優等生の沙織のこと、万事手ぬかりはない。ちゃんと窓際のいちばん見晴らしの良いテーブル席をゲットしていて、あたしが店へ入るなり立ち上がったて手招きした。

「ゆみ子ー、こっちこっちっ」

「ごめーん、あたしってば時間ぎりぎりー」

「やっとシンデレラのお出ましか」

「この暑さで、かぼちゃの馬車がエンジン火い吹いちまって」

「そうか、じゃあ今度からハイブリッドにしろよ」

ケンジが「よう」と片手をあげた。相変わらず安っぽい金メッキのネックレスに、ラメ入りでらつてらのスカジャンを腕まくりして着ている。背中んところには金糸で「JAPAN」なんて、でかでかと刺繍されてる。まじ、このファッションセンスにだけは付いていけない。ってか沙織、なんでこんなに軽くて薄っぺらなやつと付き合ってるんだろ……？ 男と女の仲って、ほんと不思議。

「なんだゆみ子、今日はバツチりめかし込んでるじゃん」

「ちいっす。てか、あんたどこの組のチンピラよ？」

「あ、ひでーな。彼氏のいないお前のために骨を折ってお見合いのお膳立てしてやったの、このケンジさまなんだぜ」

「はいはい、感謝してますって。……それより肝心の、あたしの王子様はどこ？」

「それが、まだ来てないのよねー」

沙織が、七宝焼みたいにくっつきと色彩の乗った爪で携帯電話をつかみあげると、ぱちん、ディスプレイを開いて時刻を睨み上げた。「もう来てもいいころなんだけど……」

どうやら相手の男の子は少し遅れてるみたい。こんなことなら、急いで来ることなかったな。

「いらっしやいませ、お決まりですか？」

黄色いチエックがらのエプロンをしたウェイトレスが注文を取りにやって来た。うーむ、どうしようかなあ、ここではくばく食べたらはしたないかな。相手の男の子に、なんて食いしん坊なやつなんだって嫌われちゃうだろうか……。メニューを睨みながら、うむむむと唸っていたら、そんなあたしをあざ笑うかのようにお腹がぎゅるーつと鳴った。

だめだあ、女の子はぜったいに食欲には勝てない。

人間の二大本能であるところの食欲と性欲のうち、どちらか一方だけを満たすことができるとしたら、そう究極の選択を迫られたら、ほとんど全ての女の子が食欲のほうを選ぶだろう。女の子というの

はそういう生き物だ、けつきよく食べる欲求にはあらがえない宿命を背負っているのだ。

などと自分自身に苦しい言い訳をしておいて、あたしはこの際がつつり食事することで腹をくくった。

「えつとねえ……、じゃあグリルド・チキンとマツシユルムのサンドイッチに、ほうれん草のクリームパスタ、それとシーザーサラダに、あとストロベリーチーズケーキもください。あ、全部一緒に持ってきてかまわないですから。それとアイスココアもお願いしますっ」

「アホか、あんたは」

沙織が、呆れ顔で言った。

「これからデートするっていうのに、そんなにたくさん食べてどうすんのよ」

「だって……」

「だってじゃないでしょ、あんたのためにこっちだって貴重な時間さいて来てんだから、少しは真面目にやってよね」

「でもほら、腹が減ってはいくさはできないって、むかしの偉い人も言ったじゃない。だれの言葉だっけ？ えつと織田信長？ あれ、違ったかな、坂本龍馬？」

「どっちも言わない。ってかあんた、いったいだれと戦う気してるのよ？」

「沙織いー、あたしひもじいようー」

そう情けない顔で取りすがると、彼女は脱力して深いため息で肩を上下させた。

「もうー、肉圧でスカートのボタン、ぴーんと弾け飛んだって知らないからね」

「そんな恥ずかしいことにはならないもん、あたしスレンダーだもん」

そのとき、沙織の向かいで赤の他人を決め込んで窓の外をながめていたケンジが「おっ」と弾んだ声を出した。

「来たよ、来た来た、ようやく色男のご到着だぜっ」

ガランゴロン。

扉が開く。

逆光でまだ顔はよく見えないけど、店の入り口にすらりと背の高いシルエットが浮かび上がった。あのひとが大高サッカー部のキャプテン、ケンジの中学時代の同級生、そしてあたしの王子様……。「いらっしやいませ」

歩み寄るウェイトレスを手で制しておいて、そのひとは二、三步店のなかへ踏み出したところで立ち止まった。どうやら、あたしたちのことを懸命に探してるみたい。

「おーいつ、高木ーっ、こっちだぞお、こっちこっち」

ケンジが中腰になって手を振ると、その高木くんも、ひらりと片手を上げて応えた。うん、身のこなしがとつても爽やか。さすがスपोर्टスマンって感じだね。彼は、あたしたちを見つけると嬉しそうに微笑みながら早足に近づいてきた。

「やあ、ごめんごめん」

やばい、まじ格好いい。

彼の姿がだんだん近づいてくるにつれ、あたしの胸はときめいた。思ってたとおり、いや思ってた以上に、めっちゃ、まじで格好いい。

部活やってるひとつてみんなボーズ頭なのかなって思ってたけど、彼の頭は茶色く染めたショートヘアだった。おまけにピアスまでしている。顔は日に焼けて少し黒いけど、でも目鼻立ちがすっきりと整ってて肌もきれい。もし今どきの標準的なイケメンの顔をモンタージュ写真で作成したら、きっとこういう感じになるだろうな。こんな格好いいひとと手をつないで街中を歩いたりしたら、きっと道行く女性はみんなジェラシーのこもった熱い眼差しで振り返ることでしょう……。

「遅れてもうしわけない。じつは知り合いの車で送ってもらおうとしたら、この暑さでエンジンがオーバーヒートしちゃってさ……」
うふふ、あたしと同じこと言ってる。

立ち上がってあいさつしようか、ケンジが紹介してくれるまで大人しく待ってようかと悩んでいると、彼は爽やかな笑顔を浮かべたままで、あたしのすぐそばまで歩み寄ってきた。

「やあ」

「……ど、どうもでしたあ」

びっくりして身を固くしていると、彼は身をかめてすーっと顔を近づけてきた。あわわわ、もう心臓ばっくんばっくん、突然の出来ごとにまるで金縛りにあったみたいに動けなくなる。彼の体からはムスク系の少しえっちな香りがした。ちょっと近いです、近いですってば。

彼がごく自然な動作であたしの背中へ手を回してくる。

な、なにをなさるおつもりでしょう。まさか西洋風のあいさつか……？ 肩を抱き合って、ちゅっとかいうやつ？ ま、まずい、ナイフとフォークさえ上手に使えないあたしに、とてもじゃないけど西洋風の洒落たあいさつなんて無理。そう思って身じろぎすらできずに固まっていたら、彼はあたしの背中からなにかをぺりっとはぎ取った。

へっ？

「ははは、君って面白いね。これをずーっと背中にくっ付けたまま、この店にいたのかい？」

ひらひら。

彼の手が、ハガキ大のメモ用紙らしきものをつまんでいた。

そ、それって……、まさか今の今まで、ずっとあたしの背中に貼り付いてたの？ ウソでしょーっ！ あたしは半分パニックになりながらも、素早くその紙に書かれている文字に目を走らせた。そこには赤いマジックペンで、はっきりくっきりこう書かれていた。

わたし二股かけてます

あたしは、さーっと青くなり、次の瞬間には、ゆでダコみたいに真っ赤になった。

「よっ、よっ、よおおすけええええーっ！」

おっじさま登場？（後書き）

今年がんばるよ。……ほんとだよ
（T
|
T）

やだもつ、高木くんって素敵！

ヨウスケなんてもう知らない！

一生口きいてやるもんか、あの、おたんこなすの、あんぽんたん、もう、ばかばかばかつ。

あたしは顔から火のでる思いで、身をすくめて縮こまった。どうしよう……。高木くん、きつとあたしのこと軽薄で尻の軽い女だっと思ってるだろうな。当然だよ、二股だもんね、彼からしてみれば「お前いつたい、なに様のつもりよ？」って感じだよ、もうありえないよね、とんこつ醤油味のチーズケーキくらいありえないよね。ああ、へこむなあ……。この一週間ずっと思ひ焦がれてきた、ときめきの出会いのシーンが結局これだもん。まじ喜劇だよ、笑っちゃうよね……。ヨウスケめ、おぼえてるよー、近いうちに必ずお仕置きしてやるから、いじめてやる、泣かしてやるんだから……。

あたしはヨウスケの心ないイタズラに内心憤慨しながらも、なんとかしてこの場を取り繕わなきゃいけない必要にせまられ、おそろおそろ高木くんの顔を見上げてみた。

「あ、あの……」

ところが慈悲深い彼は、あたしがなにか口にする前に、爽やかな笑みを浮かべてこう言った。

「はははっ、ひどいことをするやつがいるもんだなあ。こういうの愉快犯っていうんだろ？ 無作為に選んだ女の子に狙いすましてイタズラをしかける。こんなことして喜ぶなんて、ほんと最低のやつだと思うよ」

うんうん最低、ヨウスケなんてもう最低のお子ちゃま低能少女。それに引き換え、あたしの王子様ってすごく大人、まじ優しくってもう感動しちゃう。だってこの告発文を、根も葉もない場当たりのな犯行として、一笑に付してくれたんだもの。つまりは、あたしの

ことを信じてくれたってこと。こんなに純真無垢で可憐な美少女が二股なんてかけるわけないじゃん、わはははっ、片腹痛いぜ！　みたいな。

あたしはもう嬉しくって、この背の高い、イケメンの、優等生のお金持ちのボンボンの、サッカー部のキャプテンのことが、ますます好きになった。……高木くんって、ほんと素敵。

「それにしても外は暑いなあ、俺こんなもん着てくるんじゃないかなかったよ」

彼は、Ｔシャツのうえにライトグレーの薄手のパーカーをはおっていた。たしかに今日みたい、ぎんぎらぎんのお天気にはタンクトップ一枚着てればじゅうぶん、もしここが街中でなくて例えば友だちん家の庭先とかだったりしたら、海パンに麦わら帽だってぜんぜんオツケーなくらいだ。

彼はじんわりと汗のにじんだそのパーカーを、鬱陶しそうに脱ぎはじめた。でも動きがなんだか不自然。左手はだらんと下げたままで、右手だけを窮屈そうに動かしてパーカーの袖から腕を抜こうとしている。

「なんだ高木、お前その手どうしたんだよ？」

ケンジがのんきな声を出した。見ると、高木くんの左手は、手首から先が包帯でぐるぐる巻きにされていた。

「ああ、これか……。じつは練習試合でシュート受けそこねちゃってさ。たんなる突き指だと思ってたんだけど、医者行って診てもらったら、もろ骨折してて……。参るよなあ、本当のこと言うと昨日ようやくギブスが取れたばかりなんだ」

「うわ、それは大変だったな。考えてみりゃ、ゴールキーパーってちょー危険なポジションだもんな。俺『少林サッカー』観てて、つくづくそう思ったよ」

「ははは、あれは映画のはなし。けどまあ、危険なポジションってのはその通りなんだ。敵の打ち込んでくるシュートを身を挺して阻止しないといけないからね。他の選手よりケガが多いのは致しかた

ない。俺も練習試合ではなんとか相手のシュートをはじいて僅差を守り抜いたんだけど、おかげで結局このざまさ。もうインターハイ出場はあきらめてるんだ」

ちよつと淋しそうに微笑んで、高木くんはため息をついた。そうか、彼ケガしてたんだ。そうだよな、じゃなかったら今ごろインターハイへ向けて猛練習中のはずだもんね。女の子と遊んでるヒマなんてないよね。

なんだか、ちりつと胸が痛んだ。高木くんサッカー出来なくて可哀想……。ややぎこちない動きであたしの真向かいに腰をおろす彼を上目づかいに盗み見ると、ちょうどむこうもあたしのことを見ていて、ばつちり目が合ってしまった。どきつとした。お互いの視線が瞬時にからみ合い、加熱してばちちつとまばゆいスパークが散った。彼の瞳の奥には、なんだか無数の星が瞬いているように見えた。一方、あたしの目からはラブコメのコミックみためにハートマークがびよーんとせり出した。くらつと目眩を感じ、あたしはそのまま俯いてしまった。やばっ、ラブエナジー強烈すぎで、早くも恋の防御シールドを突破されたもよう。

それから少しのあいだ妙な間があつて、その沈黙にいたたまれなくなつたあたしが捨て身のギャグを飛ばして場の雰囲気なごませようかと覚悟を決めたとき、沙織がパンプスの先でケンジのすねを蹴った。のんきにストローの先をくわえてアイスコーヒーをすすっていた彼は、げほつと咽せたあと彼女の顔を見て二回瞬きした。

ケンジ（はい？）

沙 織（ちよつと、ばけーつとコーヒー飲んでないで、彼にゆみ子のこと紹介してあげなさいよ）

ケンジ（あ、悪い悪い、すっかり忘れてた。そういえば、こいつら初対面だったもんね）

沙 織（当ったりまえでしょ。ほら見なさいよ、二人とも気まずくて黙りこんでるじゃないよ。まったく気が利かないんだから）

ケンジ（わーったよ、今紹介するから、そうぼんぼん言うなって）

一瞬のあいだに目と目でそんなやり取りを交わしてから、二人はあたしたちのほうへ向き直って、えへへーと愛想笑いを浮かべた。そのあとケンジがおもむろに咳払いして高木くんに言った。

「あー、一応紹介しておくよ。この子が電話で話してた、井上ゆみ子ちゃん。沙織のクラスメイトで、俺もけっこう付き合いは古いんだ。見てのとおりルックスはまあまあだし、話とかもけっこう面白いけど、なにせ気は強いわ、食い意地ははってるわ、男まさりにバイクは乗り回すわ、なんでもすぐ首突っ込みたがる厄介な性格してるわで、いやもう……」

あたしはお行儀よくすすっていたアイスココアをあやうく吹き出しかけた。てめー、ふざけたこと言ってるなよこら。沙織が再びヒールの先でケンジのすねを蹴る。

「あ痛てっ、……いやなんつーか、その、とにかく根はとても良い子なんだ。だからまあ、つき合ってみて損はねーと思うぜ、ははは……」

アホかい。あたしは再び真っ赤になった。なんて紹介のしかたしてくれんのよ、この軽薄チンピラ男は。こいつの空っぽの頭がち割って脳みその代わりにプリンアラモードでも詰めてやりたい。そんな衝動にかられたけど、今はそんなこと考えてる場合じゃない。ここはぐつと堪えて、あたしの王子様になんとか自分の可愛らしさをアピールしておかねば……。

「ゆみ子ですう、どうぞよろしくですう」

「俺、高木隼人といいます。ケンジとは中学時代の同級生で、高校は別々だけれど、このあいだばったりゲームセンターで再会して、その後なぜだかこんなふうに着と会う約束しちゃって……。俺、インターハイ出れなくなって、ちょっとへこんでただけで、でもおかげでキミみたいな可愛い子と知り合うことができて、こういうのケガの功名っていうのかなあ、なんて……とにかくよろしくね」

そう言って、彼は真っ白い歯を見せながら笑った。その少年のような笑顔が、あたしの無防備なハートを撃ち抜いた。ずっきゅーん

！　そして、あたしの脳内BGMは、ワルツからサンバへと変わった……。

つづく……。

理想の彼氏

高木くん、きつとサッカーの話しかないだろうなって思って、昨日は一夜づけでサッカーの知識つめ込んできたけど、でも意外なことに、彼はサッカーの話題にはほとんど触れなかった。あたしたちのお喋りはもっぱら学校生活のことからはじまり、最新のファッションやヒット曲、それから美味しいスイーツを食べさせるお店に芸能ネタへと、とりとめもなく移り変わっていった。その間じゅう、彼はあたしたちの薄っぺらな話題にも難なく調子を合わせ、巧みに相づちを打っては場の雰囲気盛り上げた。ときおり沙織が哲学的な話題なんかを振ると、高木くんは彼女が舌を巻くほどの博識ぶりを披露してあれこれとウンチクを語り、あたしたちを驚かせた。とにかく頭の良いひとだなあと感じた。

あと、これはあたしの直感なんだけど、彼、意外と女の子慣れしてるかもしれない……。

まあ、それも当然と言えば当然、このルックスだもんね。育ちだって良いし、モテて当たり前って気もする。可哀想に、横にならんだケンジがえらく霞んで見えた。てか、こいつの場合、基本的に下ネタがおバカな話しかないし……。

話も盛り上がりようやく彼ともうちとけてきたところで、がらりとカートを転がしてウエイトレスがやって来た。

「お待たせいたしました」

テーブルに次々と料理をならべてゆく。

グリルド・チキンとマッシュルームのサンドイッチ。

ほうれん草のクリームパスタ。

シーザーサラダ。

ストロベリーチーズケーキ……。

だ、だれだ、こんなに食ういやしん坊は？ あたしだ……。

すべての皿が、あたしの目の前にならんだ。せつかく高木くんの

前でおしとやかに振る舞って可愛らしさを演出していたのに、あたしって大ピンチ。冷や汗を流しながら、この状況をどうフォローしたらいいか目をうるうるさせていると、見るに見かねた沙織が助け舟をだしてくれた。

「あれ、ゆみ子そのパスタとケーキ、あたしがオーダーしたやつじゃん」

「え？ …… ああ、そうね、あのウェイトレスさん、これぜんぶ、あたしが食べると思ったのかしら？」

「だよねえ、これからデートするつてのに、こんなにいっぱい注文するバカいるわけないじゃんね」

沙織が、にやりと意地の悪い笑みを浮かべる。う……、やな性格。やや引きつった顔で作り笑いするあたしの前から、パスタとチーズケーキが引っぱられてゆく。ずりりり。…… ああ、あたしの愛しいストロベリーチーズケーキ。とろふわの食感と口のなかで広がる甘酸っぱい味覚を想像して、少し悲しくなった。でも沙織の友情には素直に感謝しなくちゃね。彼女にむかって目で「さんきゅ」ってお礼を言つと、同じくむこうも目で「当然ここの支払いは、あんただからね」と返してきた。はいはい、分かってますって。

そんなあたしたちのようすを、高木くんは、なに言うでもなく終始にこにこ見つめている。やだなあ、なんか彼にはぜーんぶお見通しって感じ……。このていどの料理、ふだんなら大口あけてあつという間に平らげてしまっただけど、王子様の視線を意識するあまり、食べ終えるまでに倍以上の時間をかけてしまった。それでもサンドイッチとサラダの味をじゅうぶんに堪能し、満足げな顔をしていると、ふふつと笑いながら高木くんが言った。

「ものを美味しそうに食べる女性って素敵だね」

「え？」

やだなあ、あたしってば、そんなに意地汚い顔して料理食べてたのだろうか……。

「最近は何泊もシヨンを気にしてちゃんと食べない子が多いけど、

本来、女性の美しさってのは日々の健康のうえに成り立っていると思うんだ。それにものを食べる仕草って女性のチャームポイントのひとつでもある。料理を美味しそうに食べる女の子って、ほんと可愛いとを感じるよ」

まじっすか！ 高木くんってば、まじっすか！ 良いこと言うなあ、なんか嬉しくて泣けてくるよ。こんな食いしん坊のあたしのことを肯定するような発言。おお、神よ、このような素晴らしい男子とお引き合わせくだされたことを、わたくし生涯かけて感謝いたします、あーめん。……こんなことならパスタとケーキ、沙織にあげるんじゃないかな。

なごやかに食事も済んだところで、沙織があたしと高木くんを交互に見ながら、にやけた顔で言った。

「それでは宴もたけなわではありますが、あとは若い二人にまかせて、あたしたち邪魔ものは退散するとしますかね。うひひっ」

こらこら、あたしたち同じ高校二年じゃん。てか、なによそのいやらしい笑いは。

やがてあたしたちは、四人そろって店を出た。

外は相変わらずぴーかんのお天気で、照りつける陽射しがちりちりとうなじを炙り、わきの下や背中からぶわっと汗が吹き出してくる。それでも午後になって少し風が出てきたみたいで、街路樹の枝をすき間なくうめる青葉がしゃらしゃらと揺れ、生暖かい風があたしの頬をなでてゆく。よく見ると、ずっと東の果てにもくもくと入道雲がわいていた。吸い込んだ空気がむっとするような湿気をふくんでいる。もしかしたら今夜は雨になるのかな……。

「じゃあなケンジ、今日はサンキュー」

高木くんが、ケンジに向かって包帯の巻かれていないほうの拳を突き出した。ケンジがそれに自分の拳をちゃんとぶつける。

「おう、そのうち気が向いたら電話でもくれや」

「分かった、きつとするよ」

そしてお互い白い歯を見せ合って笑った。うんうん、青春だねい。

ちなみにケンジは、相変わらず前歯が一本欠けている。いい加減、差し歯入れろって。

「沙織、いろいろとありがとね」

白いノースリーブのワンピースをお洒落に着こなした沙織に向かって、心からお礼をのべる。すると彼女は、ガッツポーズをつくって意味ありげにウィンクしてきた。

「ゆみ子、ふぁいと」

「うん、ありがと……」

スカジャンの内ポケットから取り出したタバコをくわえ、火をつけようとするケンジの頭をぴしゃんと叩いておいて、沙織はバイバイと小さく手を振った。そのまま二人して、あたしたちに背を向け駅のほうへと遠ざかってゆく。仲良くならんだ後姿がファッションビルの角をまがる瞬間、ケンジが沙織の肩に腕をまわし自分のほうへぐいっと引き寄せるのが見えた。なんだかんだ言っただけの二人、けっこうお似合いなんだから……。

ちよつと羨ましいなって思いながら、あたしは高木くんの顔をそつと見上げた。彼もあたしを見下ろし優しく微笑みかける。うん、この身長差がベリーグっど、少女マンガに出てくる恋人同士みたいで、ちよつと良い感じ。

「さてと。ゆみ子ちゃん、僕らはこれからどうしようか？」

高木くんが言った。あたしは、つとめて控え目な女の子を演出しながら、少しはにかんで見せた。

「あの……高木くんにぜんぶお任せします」

「じゃあ、とりあえずこの辺をぶらぶら歩きながら考えよつか」

「うん」

さつき出会ったばかりだし、手をつないだりなんてことにはならないだろうなって思ったけど、万が一ということもあるので、あたしは高木くんの右側を歩いた。彼、左手ケガしてるから……。でも、まるでそんなあたしの下心を見透かすかのように、彼はごく自然に指をからませてきた。びっくりして一瞬身を固くしたけれど、でも

いつの間にか二人は手をつないで歩いていった。最初見たとき、彼のことウブで純情なスポーツマンだとばかり思ってたけど、なかなかどうして、かなり女の子の扱いには慣れている。ひょっとして、ものすごいプレイボーイだったりして……。

雑居ビルのならば駅裏のせまい路地には、商売をあきらめてシャッターを下ろした店もけっこう多いけれど、思い出したようにぽつりぽつりと若者向けのブティックやら雑貨店が顔をのぞかせている。そんなお洒落でどこか怪しげなお店を一軒ずつ冷やかしながら、あたしたちは肩を寄せ合って歩いた。ときおり女の子どうしのグルーブなんかに行き合つと、きまって羨望のこもったまなざしをこちらへ向けてくる。うん、やっぱり高木くんって、存在感ばつぐん。ちょっとだけ優越感に浸って、るんるん、浮かれ気分になった。

やがてめばしいお店はあらかた見終わり、二人してクレープ屋のベンチに腰掛けてソフトクリームをなめてるとき、高木くんが言った。

「俺さ、親からは医者になれって言われてるけど、本当はもっと違うものになりたいんだ」

そつと高木くんの顔を見る。彼は、ぼんやりとした目でどこか遠くのほうを眺めていた。その顔が妙に大人びていて、あたしはまた少しどきつとした。

「高木くん、将来はサッカー選手を目ざすんじゃないんですか？」

「まさか、そこまでの実力はないよ。うちの学校は県大会でさえ優勝したことないし、それにプロのサッカー選手めざしてるすごいやつなんて掃いて捨てるほどいる。俺なんかじゃ、とても……」
「うーむ……じゃあ高木くんのなりたいものって、一体なんだろう？」
溶けてくるアイスクリームを必死に舌先ですくい上げながら、あたしはあれこれと想像をめぐらせてみた。……分からね。

「ねえ、笑わない？」

高木くんがあたしを見る。

「え……、ええ、もちろん」

あたしも高木くんのことを見つめ返す。

「じつは俺、ガキの頃からずっと宇宙飛行士になりたかったんだ」

つづく……。

プラネタリウム

「星が好きなんだ」

白い歯をのぞかせて、高木くんは笑った。それから、うーん、ん、んと伸びをして胸一杯、夏の空を吸い込んだ。白く反らせた喉がやけに尖って見える。あたしもそのまま、ゆっくりと視線を上げた。きれいに澄み渡った紺碧のグラデーションが、どこまでも果てしなくつづいている。飲み込まれそうなくらいの天空の高み、それはそっくりそのまま宇宙の色をしていた……。

「いつの日かスペースシャトルに乗って大気圏の外へ飛び出してみるのが俺の夢さ。上下左右、三百六十度ぐるっと星の海に囲まれながら、地球に残してきた恋人のことを想う。ああ、あの青い星のどこかに自分の愛するひとがいるんだなって、今ごろ空を見上げて俺のことを思い出してくれているのかなって……。子っぱいかな、こっういの？」

「うっん、子どもっぽくない……」

高木くんって、めっちゃロマンチスト。

高校二年ともなると、卒業後の進路が絶えず頭のなかをかすめる。なにげない雑談の合間にも、将来はなんの仕事がしたいだの、どこそこの企業に勤めたいだのという話題がひっきりなしに飛び出してくる。それまで漠然と思い描いてきた子どもっぽいや夢とか、そんなものはかなぐり捨てて、真摯な気持ちで現実と向き合いはじめる。でも夢は夢として、ちゃんと心のどこかへ仕舞っておきたい。その夢が叶うとか叶わないなんてのは、ぜんぜん別の話。やがて高校を卒業して大人になっても、ずっと胸に秘めていたその思いは、きつと自分自身を支える強さとなるはず。

高木くんは、ちゃんと自分の夢を持ちつつづけている。すごいなあと感じてしまう。自分はどうかだろう、なにか夢と呼べるものがあるだろうか。いつの間にか目の前に敷かれているレールに沿って、

なんの疑いもなく、ただなんとなく足を進めているだけではないだろうか……。

そんなことを考えながらソフトクリームのコーンを口のなかへ放り込むと、まさにそのタイミングで高木くんが言った。

「そうだ、これから星を見に行かないか」

思わずサザエさんのエンディングみたいに喉を詰まらせ、目を白黒させた。んが、ぐぐ……。

「あれ、大丈夫？」

「……だ、だいじょぶ、です、けほっ、けほっ」

あやうくアイスを喉に詰めて窒息死した日本初の女子高生になるところだった。世の中どこに生命をおびやかす危険が潜んでいるか分からない、くわばらくわばら……。

「えと、星……ですか、こんな昼間に？」

「もちろん本物の星じゃないさ。プラネタリウム、俺の手作りなんだ」

言うが早いか彼はベンチから立ち上がり、あたしの手を引っぱった。

「ねえ、行こうよ、とっても綺麗だよ。きっと君も気に入ると思うからさ」

「あの、でもどこにあるんです、そのプラネタリウムって……」

「ここからだ歩いて十分とかからないよ、とっておきの秘密の場所があるんだ」

どうしたものかと逡巡したけど、でも特に予定があるわけじゃないし、それにプラネタリウムってなんか涼しそうな言葉の響きがある。あたしは黙って彼について行くことにした。

猥雑な雑居ビルのすき間を縫って駅とは反対のほうへ歩いてゆくと、しばらくしてこの界隈でもひととき寂れた場所に出る。まず目につくのが、潰れたボーリング場、それから同じく営業をやめて久しい廃墟のようなパチンコ店。ここは駅裏商店街を区画する地域のなかでもっとも辺境にあたり、県道を隔てた向こう側には、もう町

工場や運送会社の倉庫が建ちならぶ工業地帯が迫っている。かつてはその工業地域を大々的に宅地化して売り出す計画があり、今あたしたちが立っているこの場所も一大ショッピングモールへと生まれ変わる予定だった。ところが政治家先生の気まぐれか、それとも不動産業者の思惑なのか、ある日とつぜん宅地開発は中止となりすべては砂上の楼閣と化した。そしてそのときから、ここいら一帯は急速に寂れはじめたのだ。

「……え、このビルなの？」

それは、路地からさらに奥まったせまい敷地にひよろりと建つ、七階建てのテナントビルだった。ただし無人の廃墟ビル。一階の窓ガラスはすべてメチャクチャに割られ、その上をベニヤ板でやみくもに塞いでいる。正面入り口にある回転式ドアには木材をばってんに打ち付けてあり、もちろん人が出入りできる様子はない。あたしは心配になって、高木くんを見上げた。

「ねえ……、ここ入れないよ」

「だいじょうぶ、建物の裏側へ回れば勝手口が開いているから。俺いつもそこから出入りしてるんだ」

「でも、無断で入ったりして怒られないかな？」

「心配ないよ、ここはずっと以前にオーナーが夜逃げしてしまって、そのまま競売にもかけられず長いあいだ放置されているんだ。まあバブルが生み出した負の遺産つてとこかな。建物のなかは、まったくの無人だよ。こんな汚いビルだれが好きこのんで入るもんか」

そう言う和高木くんは、せまい通用門をまたいでずんずん奥へと入ってしまった。一瞬、躊躇したけど、でもせっかくここまで来たんだし、それに内部はかなり涼しそうだったので、あたしもミニスカートのすそをひるがえして、ちやちなアルミ製の門を乗り越えた。ビルのなかは、まさに廃墟だった。廊下や階段にはゴミやガラスの破片が散乱して、一步踏み出すごとにしやりつと鋭利な音を立てる。予想どおり空気はひんやりしていた。でもなんだか埃っぽくて、おまけにカビ臭い。ちよつと心細くなつて、あたしは高木くんとは

ぐれてしまわないよう必死になって後を追った。

やがて、四階の一番奥にある扉の前まで来ると、彼は立ち止まって振り向いた。

「ほら、ここだよ」

かたむいて外れかけた看板には、レンタルビデオ・スカイとあった。試写室完備、一時間六百円……。見たところ、ドアにも壁にもいつさい窓がない。代わりに色あせたポスターが何枚もべたべた貼られている。ゼーんぶアダルトビデオの宣伝。なんか、ものすごくいかがわしい感じのする場所で、思わずうえって声が出そうになった。

「ここは外から光が漏れない造りになっているから、プラネタリウムを見るにはうってつけの場所なんだ」

「……ふーん」

高木くんはドアノブに手をかけ、ゆっくりと引いた。カギはかかっていない。ぎぎいっと錆ついた音を立てて重たいドアが開いてゆく。たしかに彼の言うとおり、なかは一切の光が遮断され真っ暗だった。廊下から刺し込む光の帯だけが、部屋の中を漂う埃をきらきら光らせている。入ってすぐ正面がレジカウンター、そこから奥へむかって店舗と試写室がつづいているようだ。なんのためらいもなく、高木くんの姿はその暗がりのなかへすっと吸い込まれた。

「ああん、待ってよ」

あわてて、あたしも後を追った。背後でがちゃりとドアの閉まる音がした。と同時に、部屋のなかは濃密な闇の世界となった。窓はどうやらなにかを貼り付けて塞いでいるらしく、すき間からわずかな光が漏れさし込んでいた。その微細な明かりが、店舗内部の輪郭を薄ぼんやりと浮かび上がらせる。

「……ねえ高木くん、どこ？」

返事がない。目を凝らして、彼が消えた辺りを凝視してみる。きつと悪ふざけして、どこかへ隠れているんだろ。あたしのことを怖がらせようとしたってダメ、その手には乗るもんか。そんじょそ

こいらのキヤーキヤー煩いだけでからつきし根性のない女子高生と一緒にしてもらっては困る。あたしはいつだって行動派なのだ。

打ち捨てられたまま床に散乱しているビデオテープにつまずかないよう気をつけながら、あたしはそろりそろりと探るような足取りで奥へと進んだ。だんだん目が慣れてきて、店舗の部分はさして広くないことが分かった。でも高木くんの姿は確認できない。店のさらに奥は廊下になっていて、その両側に試写室とみられる小部屋のドアがならんでいる。きつとあのどこかに隠れて、あたしが怖がっている様子を楽しんでいるんだろう。けっこう悪趣味なひとだ。

そのときあたしは、ふとある違和感を感じた。タバコのおいがするのだ。かなり濃密に漂っている。かつてその場所で誰かが吸っていたとか、そういうレベルじゃない、今目の前で煙を吐き出してるって感じた。まさか、高木くんが吸っているのかな……？

そのとき闇のなかで、もぞりとひとの蠢く気配を感じた。高木くん？ 違う……、しかも一人じゃない。はつきりとは見えないけど、部屋のなかにだれかが潜んでいる。

「……だ、だれかいるよ。ねえ高木くんってば、ここだれか他のひとがいるよ」

答える代わりに、くつくつと噛み殺すような笑い声が聞えた。あたしの正面から、右奥から、左の後ろからも。

どこからともなく、おどけた感じの男の声がした。

「おい高木い、またプラネタリウムってかあ？ おめえもワンパターennaやつだな」

四方から、いつせいに笑いがおこった。

やばい、だまされた。

恐怖を感じ、全身がぞうつとおぞ気だった。すぐに逃げなきゃ。

あたしは身をひるがえし、自分が今入ってきたドアへと急いだ。

「おっと、逃がさねえよ」

「ひっ」

すぐに後からだれかが追いかけてきて、あたしの腕をつかんだ。

.....<u>u>

プラネタリウム（後書き）

ああ、ゆこたん危うし！

もしかして、あーんなことや、こーんなことされちゃうかも（＊

、＊）

というわけで、この連載はノクターンのほうへ移動します（うそ）

あたしってば、大ピンチ！

「やだ、ちょっと離してったら」

あたしは、後ろからつかみかかってくる相手の腕を必死に払いのけながら怒鳴った。こういうときって、きゃー、とか声出ないもんだ。闇のなかに目をこらし、追ってきた男の黒いシルエツトを睨みつける。自分でも驚くほど冷静に声が出た。

「なんなのよ、あんたら。あたしのこと待ち伏せしてたってわけ？ ばっかじゃないの、こんな真っ暗な、しかもゴミダメみたいな汚い部屋のなかで」

相手の口もとあたりで、ふっと空気の動く気配がした。どうやら笑っているらしい。なにか喋りつづけていないと恐怖でパニックを起こしそうなので、あたしはことさらに語気を荒げて口汚くののしった。

「だまして、こんなとこへ連れ込まなきゃ女の子に相手してもらえないなんて、可哀想なやつらね。どうせ日の当たる場所じゃ晒せないようなちょー不細工なツラしてんでしょ、キモっ、まじキモっ、こんな手の込んだことしてねーで大人しく家に帰ってマスターベーションでもしてろって、このチンカス野郎っ」

突然目の前でLEDが点灯し、まばゆい光があたしの目を射た。どうやらペンライトであたしの顔を照らしているらしい。瞳孔がずっと窄まり、暗闇に慣れていた目が痛みを覚える。光線を手で遮って顔をそむけると、とたんに嬉しそうな声が出た。

「おっ、この子すんげー可愛い顔してるじゃん」
「どれどれ」

右からも左からも、ペンライトの明かりが無遠慮にあたしの顔を照らす。

「おっ、まじ可愛い。やったな高木い、お手がら、お手がら」
「でしょ、今日のはなかなかの掘り出しもんだと思ってるんだ」

高木くん改め、高木のクソツタレの声だった。

「今日のはって……あんたたち、いつもこんなバカなことやってんの？」

「へへ、ダメされて、のこのこついてくる間抜けな女が多いもんでね」

「そうそう、飛んで火にいるなんとやら」

別の男が、くくつと笑いを嚙み殺した。その口もとあたりでタバコの火が揺れる

「……けどよう、この前拾ってきた女はブスだったよな。ネズミみたいな出っ歯で、おまけに俺らの姿見たとたん小便垂れやがって後で掃除すんの大変だったもんなあ」

周囲でいつせいに下卑た笑いが起こる。こいつらって最低。後で交番へ駆け込んで洗いざらいチクってやる。でもそのためには、なんとかしてこの場から逃げなきゃ……。

「べつに怖がらなくてもいいんだよーん」

いきなり男の一人が背後から抱きついてきた。左耳の後ろあたりにくんくんと鼻を押しつけてくる。不快な口臭と汗のにおいを感じて全身に鳥肌が立った。

「きゃあ、なにすんのよっ」

「おっ、この子けっこう胸デカいぜ」

その男は、調子に乗ってあたしの乳をわしづかみにした。腕を振りほどこうにも、圧倒的な腕力の差に押さえ込まれてどうにもならない。

「やだつてば、はなしてったら」

「おお、このおっぱいの揉み心地、たまらん」
許せない。

かっ頭と頭に血がのぼり、気づいたときには後頭部で思いつきりそいつの顔面に頭突きを食らわしていた。

「ぐわっ……」

もろに鼻に入っただけみたいで、ごすつと鈍い音がした。あたしに抱

きついていた腕から一瞬だけ力が抜ける。今だっ！ 肩で思いきり男を突き飛ばし、身をひるがえして夢中で駆け出した。とにかくこの部屋から出よう。そうすれば、廊下の窓を叩き割ってでも助けを呼ぶことができる。

「あつ、こら待て」

いくつものペンライトの明かりが、脱獄囚を搜索するサーチライトみたいにあたしを追いかけてくる。どこよつ、出口どこ！ さっき自分が入ってきたあたりを目ざして懸命に走る。お気に入りのパンプスが片方脱げたけど構ってられない。ついでにバランスをくずして床に転がっているイスに脛をぶつけたけど、痛がつてる場合じゃない。なになに今は、あたしの純潔がかかっているのだ。暗いなか、壁に激突してしまわないよう部屋の間取りを探りながら必死で走る。すぐにキャッシュレジスターを乗せたカウンターが薄ぼんやりと見えてきた。

やった、出口あそこ。

そう思ったとたん、いきなり斜め後ろからタックルされた。二人もつれ合いながら勢いよく床に投げ出される。

「きゃあつ」

倒れたひょうしになにか硬いものに頭を打ちつけ、まぶたの奥で火花が散った。

「痛いーい」

「逃がすかよ、このアマ」

「はなしなさいよ、くそつたれ」

「うるせえつ、俺たちをナメんな」

男は腕力であたしを仰向けにねじ伏せると、お腹のうえに馬乗りになって勝ち誇ったように言った。

「へへへつ、もう逃げられねえぞ、このバカ女ちゃんしこキやがつて。……効いたぜえ、今の頭突きはよお」

そう言ったかと思うと、いきなり腕を振り上げてあたしの頬を張った。

ぱしんっ、一発。

「ひっ」

ぱしんっ、二発目。

「くっ……」

口の中に、じんわりと血の味が広がってゆく。ついでに涙もこぼれた。

「手こずらせやがって」

そこへ他の連中もやってきて、みんなで倒れているあたしを取り囲んだ。一斉にペンライトの明かりが顔に浴びせられる。くそっ、泣いてるとこ見られた。

「逃げ足早えーな、この女」

「さっさと奥へ連れていこうぜ」

「よし、お前ら手え貸せや」

お腹のうえに馬乗りになっていた男が立ち上がり、あたしの両足首をつかんだ。すかさずもう一人が両手を持った。そして二人掛けりであたしの体を持ち上げ、部屋の奥にある廊下へと引きずってゆく。冗談じゃない。身をよじって必死に暴れる。とたんに横っ腹にケリを食らった。

「ひぐっ」

「騒ぐんじゃねえっ」

あまりの痛み体に硬直した。苦しくて息ができない。てゆーか、ふつつ無防備な女の子の体にケリ入れるか？ 痛いのと悔しいのとで、また涙が出てきた。……あたしこのまま、こいつらにヤラれちゃうんだろつか。やだやだ、絶対にいやだ。負けるなゆみ子、諦めたらお終いだ、あたしは女の子の意地と貞操をかけて最期の最期まで徹底的に抗いつづけるんだ。

「わーっ、うひーっ、むもーっ！」

虚しい抵抗とは分かっていたけど、メチャクチャに体を捻りながら大声を出して懸命にもがいた。

「ばーか、叫んでもムダだって。この部屋の壁には吸音板が貼って

あんの」

「頭悪いんじゃないか、こいつ」

ちくしょう、バカにしゃがって。

ようし、そんならこいつらの前でゲロ吐いてやる。思いっきり、うえーって吐き散らしてやる。さっきいっぱい食べたから吐く自信はあるぞ。サンドイッチに、サラダに、アイスクリーム……。さすがにこいつらだって、ゲロまみれの女を犯す気にはならないだろう。よしよし、吐くためになにか気持ちの悪い食べものでも想像してみよう。えーと、なにが良いかな。

例えば、味噌汁に納豆を入れてみる……。とか。

あ、これだと普通に食べられるな。

そんじゃ、カルピスに青汁混ぜて飲んでみる……。とか。

なんか抹茶ラテみたいで美味しそう。

って違う違う、あたしのバカっ、食いしん坊、もつとハードコアに気持ち悪いもの想像しなきゃダメじゃない。例えば犬のうんちのハンバーグとか、使用済みナプキンの天ぷらとか、おじいちゃんの入れ歯の酢の物とか……。

うつっ、あんまりおバカなこと想像してたら、気持ち悪いってよりもだんだん落ち込んできた。

両側にビデオの試写室がならぶせまい廊下の突き当たりに、明らかに他の部屋とは作りの違うアルミ製のドアがあった。事務所だろうか。男たちはそのドアを引くと、いっち、にの、さんで勢いをつけてあたしをなかへ放り込んだ。

「ひゃあっ」

一瞬だけふわりと体が浮き上がり、すぐにどすんとお尻から落ちた。痛ったーい……。もうちょっと丁寧にあつかいなさいよ、くそつたれ。

どうやらその部屋は倉庫として使われていたらしく、古ぼけた段ボール箱がいくつか積み重ねられている他は、がらんとしていた。コンクリートむきだしの床にはマットレスが一枚、無造作に敷かれている。

その上に乱暴に転がされたあたしは、それでもすぐに起き上がった。めくれたスカートをなおした。そして横座りの姿勢のまま、ずりずりと後ずさって壁ぎわにぴったり身を寄せた。

部屋のなかにはLED製のランタンがひとつだけ置かれていた。キャンプなどで使うごついやつだ。その明かりを頼りに、あたしは改めて男たちの顔ぶれを一人ずつ確認してみた。光源が低い位置にあるせいで、どの顔も酷薄そうに見える。そして妙なことに気づいた。

こいつら、どっかで見たことあるような……。

男は、全部で四人いた。

一人は、高木のクソツタレ。あとの三人は、顔じゅうニキビだらけの背高のつぽと、タバコをくわえた茶髪のデブ、それに体育会系っぽい筋肉ムキムキのハゲ。このハゲは鼻から血の垂れた痕があった。さつきあたしが頭突きを食らわせたヤツだ。

どいつもこいつも、なんて人相の悪い。まるで道徳や社会秩序なんか屁とも思っていないせんみたいな……あれ、ひよつとして。

あたしの頭のなかで、ついこの間の出来ごとが鮮明にフラッシュバックする。

思い出した。

「あーっ！」

目の前に居並ぶ男たちを指さして叫んだ。

「あんたたち、電車のなかでヨウスケを襲った痴漢ーっ！」

そう、こいつらは、あたしが初めてヨウスケと出会ったあの日、後ろからバイクを追いかけてきた男たちだった。ヨウスケいわく、強姦魔。

ってゆーことは……。

ゆつくりと視線をめぐらせ、高木のクソツタレを見上げる。

「あんた、その手……サッカーで怪我したなんて嘘でしょ」

。.....<u>u>

戦闘開始、ブタのケツっ！

理知的だなあ、なんて思っていた高木のクソツタレのクールにひきしまった口もとがゆがんだ。あまり血の通っている印象をあたえない、赤みの薄い唇。今こうしてあらためて見ると、キザでいけ好かないナルシズムの象徴みたいに見えた。その酷薄そうな唇が、きゅっと醜くゆがんだまま微かに震えていた。

「……お前、なぜ知っている？ 俺の指をへし折ったあのバカ女のことを、なぜ知っているんだ？」

おっと、かなり動揺してますね。しめしめ、ここは一番こいつをもっと動揺させて、精神的優位に立ってやろうじゃないの。そうすれば、ここから逃げ出すチャンスもめぐってこようというもの。ようし見てろよ……今にぎやふんと言わせてやる。

あたしは、わざといきがって鼻で笑いながら言った。

「ふふん、知りたきや教えてやるわよ。あの子はねえ、あたしの一番のマブで、しかも恋人なの。いい？ もしあたしにひどいことしたら、あの子は絶対にお前らのことを許さない。一人ずつ草の根分けても探し出して、徹底的にぶちのめしちゃうんだから」

そこまで一気に言うと、高木のクソツタレの顔をきゅっと睨みつけた。負けちゃダメだ、こんなやつらの好き勝手にはさせない。ところが罵倒されて逆に開き直ったのか、この痴漢野郎はあたしを見下ろしながらせせら笑いやがった。

「へえ、そりゃいいや」

ふっと部屋のなかに凝ったカビの臭いが動く。つかつかと、高木のクソツタレが近づいてくる。

「ちようど俺も、あのバカ女にはもう一度会いたいと思っていたところなんだ」

そう言っであたしの髪の毛をわしづかみにした。

「いつ！」

「あいつには、マジで恨みがあるからな」

ぎりつと奥歯を噛みしめたかと思うと、あたしの頭をごんごん壁に叩き付けた。痛ててつ、やめろ、これ以上バカになつたらどうする。

「お前を痛めつけると、あいつが怒ってやって来るう？ そりゃあいいや、じゃあこれから、お前をすごくひどい目にあわせてやる」にいつと笑って、つかんだ髪の毛ごとあたしの頭をきりきりとねじり上げた。

「……やつ、ちょっとやめてよ、痛いじゃないの」

思わず苦痛で顔がゆがむ。その鼻先に自分の口を近づけて、高木のクソツタレが言った。

「裸にひんむいて、その可愛いケツを嫌というほど蹴り上げてやる。ひひひつ、その後はお待ちかね、レイプの嵐だ。もちろん、ただ犯すんじゃないぞ、その様子をビデオカメラで撮影してやる。もしお前が親や警察にチクつたら、その映像は全国へ向けて発信されることになる。お前のアへ顔がネットじゅうに流れるんだ。どうだ、愉快だろう？」

正直、体が震えた。泣いて許しを請いたい衝動に駆られる。お願い、それだけは許してください、と言って足下にすがりつきたい。でもそれはできない。そんなことをしたら……こいつらの暴力に屈したら、あたしはもう、あたしじゃなくなる。

べつにフェミニズムとか関係ないけど、あたしは女の子であるがゆえに踏みにじられるというシチュエーションが我慢できない。レイプだのドメスティック・バイオレンスだのって絶対ありえない。そういう言葉を耳にただけで、もう暴れたくなっちゃう。ケンカとかめっちゃ弱いけど、頼つぺたビンタされただけで泣いちゃうかもしれないけど、でも男子が女子をむりやり腕力でねじ伏せて乱暴するなんてそんな行為、マジで許せない。こいつらには、そのことを思い知らせてやる。今までいっただい何人の女の子にこんなひどいこ

としてきたのか知らないけど、きっと被害者の子たちはみんな怖くて泣き寝入りしてるんだろうと思うけど、でも女の子のなかには手負いの獣みたいに反撃してくるやつだっているってことを思い知らせてやる。

「ゆみ子は、ほんとうにお転婆さんね……」

死んだお婆ちゃんの、ちよつと困ったような笑顔が目には浮かぶ。しわしわ、くしゃくしゃのお婆ちゃんの笑顔。あたしって小さいころから、ずっとお婆ちゃんっ子だった。学校でケンカして泣きながら帰ってきたりすると、あたしは真っ先にお婆ちゃんの部屋へ駆け込んだ。

「あれあれ、女の子なのに、どうしてこう意地っ張りで無鉄砲なんでしょ」

あたしを膝のうえに乗せて優しく頭を撫でながら、でもお婆ちゃんには最後には必ずこう言ってくれた。

「でも、そんなゆみ子のこと、お婆ちゃん大好きよ」

負けない。

あたしは、絶対に負けない。

女の子は、男どもの下劣で思い上がった暴力に負けちゃいけない。痴漢だか強姦魔だか知らないけど、そんな人間のクズみたいなやつらの暴力に屈するくらいなら、女の子なんてやめたほうがまだ。最初に襲いかかってきたやつは喉笛に噛み付いてやる。歯の丈夫さには自信あるぞ、いつもピカピカに磨いているからな。スルメだつて、塩せんべいだつて、梅干しの種だつて、躊躇せずにバリバリ噛み砕くことができる。こいつらの喉を食いちぎるなんて朝飯前だ。さあ来い、来てみる、お前らにスプラッターな恐怖を思う存分味わせてやる。

あたしは悲壮な決意をして、横座りの姿勢のままぐつと身構えた。高木のクソツタレは、用意周到なことにデジカメを持参していた。ほんとにビデオ撮影する気だな、てめー、鬼、悪魔つ。いっぽう、のっぽとハゲとデブの三人は、欲情にきらきら目を輝かせながら、

だれが一番最初にあたしへ襲いかかるかを話し合っていた。

「この前ブスをヤツたときには、たしか俺が最後だったよな」とのっぽ。

「一番目は暴れるから大変なんだぞ。いいから俺に任せとけつて」とデブ。

「あの女には頭突きを食らわされた恨みがある。まずは俺にヤラせろ」

とハゲ。

「おうい、撮影の準備ができたぞ、だれでもいいから早くしろ」

これは高木のクソツタレ。

ふざけんな。ひとをなんだと思ってやがるんだ。やっぱりスキを見て逃げちゃおうかな。こいつら突き飛ばして遮二無二走れば、あるいは逃げ切れるかもしれない。そう思いなおして必死に頭のなかで逃走経路を思い描いていると、どうやらジャンケンに勝利したらしいデブがあたしの前まで来て、カチャカチャと腰のベルトを外しはじめた。いったんは覚悟を決めたものの、あたしのひざは面白いほどガクガクと震え出した。ビビっちゃダメだ、こいつが油断したところを喉笛に噛み付いて、敵が動揺したスキに逃げる。今はその一連の動作に集中しなければ……。

デブが、ジーンズをずり下げる。趣味の悪いがらのトランクスから、ぷーんとチーズの腐ったような臭いがした。その不快な臭いに思わず顔をそむけたとたん、あたしの心のなかで急に弱気な自分が顔を覗かせた。だめ、女の子はしょせん男どもの腕力には敵わない。むりやり押さえつけられ着ているものはぎ取られたら、もう抵抗する気力なんて失せてしまうに違いない。どんなに勇気をふりしぼったって、ここからは絶対逃げられない。

朝、家を出るときに垣間みた両親の笑顔がふつと脳裏をよぎった。

「今夜は手巻き寿司にするから、なるべく早く帰ってこいよ」

「あんまり遅くなっちゃダメよ」

パパ、ママ……。

ジーンズをひざまで下ろしたデブが、いよいよあたしにのしかかってくる。あたしは半分パニックになりながら、両腕をめちゃくちゃに振り回した。

「いやあ、やめてったら！」

あたしは今にも、うえーんって泣きだしそうだった。

でも、そのとき……。

ふっと視界のすみに、蛍の火のようなごく微小な光が放物線を描きながら飛ぶのを見た。それは一瞬のことだった。その小さな光は、あたしを見下ろしながらデジカメを構えている高木のクソツタレの背中へすつと吸い込まれた。

突如、やつが着るパーカーのフードのなかで、断続的な閃光と破裂音が起こった。がらんとする部屋の壁じゅうに反響したそれは、まるでマシンガンを乱射したときのようなすさまじい衝撃となつて、そこにいる全員の魂を縮み上がらせた。

つづく……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7136/>

女の子のうた

2011年7月5日03時24分発行